



市島春城貼込帖  
三

SECTION  
SCRAP BOOK

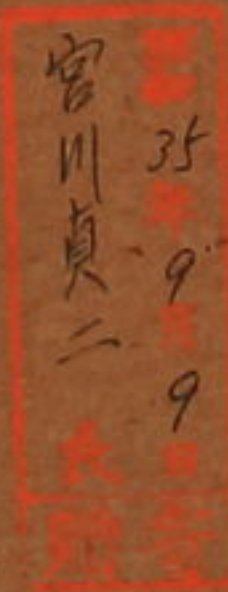
PAT APD. NO.2606 DES APD. NO.1550

O.T.S. NO. 75



14  
1919  
837

頁數  
切拔紙名  
題  
目  
頁數  
切拔紙名  
題  
目  
頁數  
切拔紙名  
題  
目



14  
1919  
181.3

頁數  
切抜紙名  
題  
目  
頁數  
切抜紙名  
題  
目  
頁數  
切抜紙名  
題  
目

The University of Chicago  
Department of Botany

昭和六年十月廿四

市島 謙吉 謹啓  
御中

山内 敬  
シカゴ大学教授  
Shigeru Yamamoto  
The University of Chicago,  
Chicago, Illinois,  
U.S.A.  
シカゴ大学植物園  
御中 敬啓

痛、御法安と云ふ事聞か  
過半は如き新先の事  
此の所を以て疑ふ事  
又、今一、一夕の御法  
歸任の事、御法安と云  
無、御法安と云ふ事  
随、御法安と云ふ事  
御中 敬啓

(下、左、右、表、裏)



大隈老侯敬慕の歌 西條八十作曲

*Larghetto.*

1. ノはリビ  
ケビケケ  
アけヤヤ  
アけたが  
アをカカ  
ルのテは  
ユはりひ  
モだアに  
ヒつミウ  
ヌばキキ  
ランアウ  
シはアミ

ニねシシ  
トカイナ  
サのセヤ  
ルけんま  
フあケイ  
ノるノん  
リゆンじ  
トをホあ  
ホラツの  
ミライイ  
ウベダが

キノノト  
トんく  
ルねまい  
ブんウク  
ヤせジイ  
ヨクテク  
ラづアキ  
カキキの  
スウアズ  
ホウアガク

メンシム  
ケシカた  
アぼうつ  
へいきを  
ヨダイカ  
ノのトの  
シラクふ  
ホカガジ  
ツクノキ  
ニコダと  
ンガセふ  
シワヲた

*rit.*

- 一、不知火燃ゆる有明の  
海のほとりの故郷に、  
鳳雛殿を破るとき
- 二、新日本の夜は明けぬ。  
藩閥打破の雄叫びは  
廟堂を揺る曉の鐘、  
英斷築く千年の  
我國家の大方針。
- 三、ああ、君ありて輝けり  
大日本の憲政史、  
ああ、君ありて十萬の  
早稲田の學徒意氣高し。
- 四、蒼穹に輝は輝けど  
蓋世の偉人今や英し、  
學園の菊、郁々と  
尊き慈父の香を傳ふ。

大隈老侯敬慕の歌 (昭和七年四月作)

西條八十作歌

御記述 意引録 三 御口出の中 収められた小品の数々、  
その上下、下、上、の三つ、  
御記述 意引録 三 御口出の中 収められた小品の数々、  
その上下、下、上、の三つ、  
御記述 意引録 三 御口出の中 収められた小品の数々、  
その上下、下、上、の三つ、

御記述 意引録 三 御口出の中 収められた小品の数々、  
その上下、下、上、の三つ、  
御記述 意引録 三 御口出の中 収められた小品の数々、  
その上下、下、上、の三つ、

御記述 意引録 三 御口出の中 収められた小品の数々、  
その上下、下、上、の三つ、  
御記述 意引録 三 御口出の中 収められた小品の数々、  
その上下、下、上、の三つ、

御記述 意引録 三 御口出の中 収められた小品の数々、  
その上下、下、上、の三つ、  
御記述 意引録 三 御口出の中 収められた小品の数々、  
その上下、下、上、の三つ、

河記正 卷外 録 志 衝口 坂の 中は 小の 品の新々 下

維レ昭和七年四月十一日、故大隈侯國民敬慕會恭シク幣帛ヲ奉シ、酒饌ヲ奠シ敬ミテ侯爵大隈重信公ノ靈ヲ祭ル、嗚呼公ノ薨ジ給ヒシヨリ荏苒トシテ茲二十年、哭泣ノ涙未ダ乾カザルニ何ゾ星霜ノ速ナルヤ、公昔シ一介ノ書生ヨリ起リテ維新ノ朝ニ立チ、一躍シテ參與トナリ、又一年ヲ出デズシテ參議ニ列シ、遂ニ其首席ヲ占ム、絶倫ノ才略アルニ非ズンバ、安ソ能ク此ニ至ラン、公ハ常ニ難局ニ處シテ擾レズ大事ニ臨ンデ善ク斷ジ、登庸ノ初ヨリ一タビ改革ノ舉ニ出ヅルヤ、邁往直前シテ群議ヲ顧ミズ、疾風迅雷ノ勢ヲ以テ之ヲ遂行シ、財政ノ整理外交ノ刷新宛モ快刀ノ亂麻ヲ斷ツガ如ク、其手腕早ク已ニ此ニ見ハル、而シテ要路ニ立ツニ及ビ、世界ノ大勢ニ鑒ミテ以テ國家ノ進運ヲ導キ、制度典章歌米ノ長ヲ採リテ以テ維新ノ治績ヲ濟ス、凡ソ當時ニ於ケル文明的施設ハ一トシテ公ノ與ラザルモノナシ、其退官ニ至ルマデ數年ノ間參議ノ首席トシテ大ニ其抱負ヲ展ベ、勢位薰灼、翹然トシテ天下ノ望ヲ負ヘリ、而シテ晩年復ビ起チテ内閣ヲ組織セシ時代ニ於テハ齒德竝ニ高ク、兩朝ノ元老トシテ社稷ニ重キヲナシ、大正天皇陛下ノ御信任極メテ厚ク攝政殿下モ亦待ツニ師保ノ禮ヲ以テシ給ヘリ、其在朝ノ豐功偉績今尙赫々トシテ人ノ耳目ニ存ス。然レドモ公ノ偉大ヲ見ルベキモノハ順境ニ在ラズシテ逆境ニ在リ、廟堂ニ在ラズシテ民間ニ在リ、公ノ言ニ曰ク、政治ハ吾輩ノ生命ナリト、乃チ窮達ニ因リテ其志ヲ變ヘズ、一旦廢黜セラレテ野ニ下ルヤ、閥族ノ壓迫ヲ被ルモ屈撓スル所ナク、堂々民極ヲ提ゲテ起チ、改進黨ヲ組織シテ之ガ總理トナリ、立憲制度ノ機關トシテ早く國會ノ開設ニ備ヘ以テ憲政ヲ扶植シ、今日ノ發達ヲ促タルコトハ豈ニ日本憲法史上ニ特筆スベキモノニ非ズヤ、古來功臣ノ隱退スル者汲々トシテ子孫ノ計ヲナスニ非ザレハ即チ聲色ニ溺レ風流ニ耽ラサル者少シ、公ハ即チ此レニ異ナリ其教育ヲ尊重スルヤ是ヲ以テ慰樂トシ、此レヲ以テ事業トナシ、夙ニ學問ノ獨立ヲ唱ヘ私財ヲ捐テ、早稻田大學ノ前身タル

東京專門學校ヲ興シ人材ヲ養成シテ國家社會無窮ノ用ニ供シ、其造就セシ所ノ俊髦今已ニ四万ニ下ラス、餘惠ノ及ブ所此レヨリ大ニシテ且ツ久シキモノナカラシ、此レ豈ニ教育史上ニ大書スベキモノニ非ズヤ、然レドモ政黨ノ樹立、私學ノ建設ノ如キハ尙ホ類例ナキニ非ズ、若シ夫レ公ノ檀場トスベキモノハ、則チ國民外交ノアルアリ、公ハ常ニ言論文章ニヨリテ日本ノ真相ヲ世界ニ紹介シ、我國國際的地位ノ向上ニ努ムルト共ニ列強ノ誤解ヲ正シテ猜疑ヲ釋キ、平和ノ大精神ヲ以テ彼我ノ情意ヲ感孚セシメ、日本國民ノ代表者トシテ世界的名譽ヲ負ヒ、大問題ノ起ル毎ニ公ノ片言隻語モ歐米諸國ニ傳ハリテ、轟然タル反響ヲ生ズルニ至リテハ開國以來獨リ公アルノミ、今世ニ獨歩スルノミチラス、將來ニ於テモ恐ラクハ其匹少カルベシ、豈ニ曠世ノ偉人ニ非ズヤ、蓋シ其氣局ノ濶大ナル、度量ノ寬裕ナル、理想ノ高遠ナル、知識ノ該博ナル、意志ノ剛毅ナル、精力ノ旺盛ナル、卓然トシテ群ヲ拔キ、之ニ加フルニ強記ヲ以テシ、之ニ重ヌルニ雄辯ヲ以テス、是レ其大人格タル所以ニシテ、朝ニ在リテハ國家柱石トナリ、野ニ在リテハ民人ノ師表トナリ、舉國追慕ノ情、久シキヲ經テ愈々切ナルモノ、豈ニ偶然ナランヤ、今敬慕會ガ特ニ此ノ日比谷公園ニ於テ祭典ヲ行フ所以ハ、曩ノ國民葬ノ例ニ循ヒ廣ク國民ト之ヲ共ニスルニアリ、公ノ靈ソレ必ズ之ヲ悅バン。公ガ已ニ世ヲ去ラレシヨリ國民ハ其指導者ヲ喪ヒ、俛々トシテ往ク所ヲ知ラス、況ヤ今日ノ如キ國歩艱難ノ際ニ於テヤ、若シ公ヲシテ在ラシメバ、吾人ハ其必ズ大局ヨリ觀察シテ善後ノ道ヲ講ズベキコトヲ知ル、其必ズ大聲疾呼シテ聯盟ノ蒙ヲ啓キ、之ヲシテ國際ノ公義ニ由ラシムベキコトヲ知ル、嗚呼己ミヌルカナ、茫茫タル天壤、焉クニカ公ヲ求メン、然リト雖モ公ノ英魂毅魄、亡ビズシテ長ヘニ存ス、冥々ノ中、將ニ必ズ皇基ヲ護リ、國家ヲ綏ンジ、國民ノ誠懇ニ對スルアラントス、庶幾クハ來格シ給ハランコトヲ。





新聞に因今後の楽山子の服装も改まらねばなるまいとあつて、筒袖を着せ帽子を戴かせた物を見せてゐた。私はこれを見て物か異を覺えた。元來楽山子は鳥獣をおどす道具だから、人間らしく見えねばならず、鳥獣の恐れる武器を持たねば、おどしがきかないから、矢を筒につがへ、弓を携へるのが通例だが、何んと云ふても楽山子は動物だから、兎もすると鳥獣の趣味を受ける。そこで工夫されたのは鳴子である。板に機木の竹刷を縫して綱で曳くと、ガラ／＼と聲を發するので、鳥獣は驚ろき飛び去る。鳴子は彼等に對しては、實に遠射砲である。楽山子と鳴子の異なる所は、鳴子は人手を要するが、楽山子はそれを要しないと云ふ點にある。

普通農家に行はれる楽山子は、藁で擬人を作りそれに仕へ古るしの笠などを冠せるのが常で、何んが藁でもないが、しかしこの粗製の人形こそ、最も百姓の形貌をツクリ、鳥獣が百姓を知つて恐ねばならぬと思はれる。しかし百姓の風俗も追々變遷して今は警笠の代りに洋帽を冠つたり、股引の代りにゾボンや袴をつたりするの、楽山子の形貌にも自然變化なきを得ないかにも思はれる。弓矢を用ひない世の中に弓矢を携へる楽山子がおどしとなるであらうか、或は甲冑らしいものを着せたりすることも事實行はれてゐるが、それが今日の鳥獣にどう理解されるであらうか。戦國時代ならば利用しやすきものがあるべきである。今も鳥獣の心理に果して威嚇となるであらうか。片田舎は遠慮が怖がられてゐるからと云ふて、遠慮に擬した楽山子を作つても、鳥獣に威嚇の効ありとも思はれない。農園の兵器も時勢に應ずる工夫が無ければならぬと思ふ。

私は楽山子を兵器と云ふたが、楽山子は單に鳥獣を威嚇する道具であるのみならず、往々泥棒を威嚇する、泥棒はおどかす戰場に樂人形を押立て、弱兵を敗走せしめた例がいくつもある。楽山子は兵器であり、時には有力な兵器である。散て弾丸を費さず敵を敗ることが出来ればこれほど經濟的の兵器は無い筈である。今は農人の形など、敵軍を威すことは不可能だが今日の發達した戦争にも、楽山子に近いものがある。例へば夜間襲來する敵の飛行機を遮る懸索網などは、飛行機がその懸索に引かれ、飛行機は墜落するの、防空の第一として夜間小さな風船玉のやうなものを揚げる、それは強い索が附されて居るので、これは空中の楽山子と見られないでもない。尙ほ世界の諸國に秘密裏に研究されつゝありと無く、無人飛行機は搭乗者がなく、電氣作用で自動するものだと云ふが、これが果して實用に供されるまで研究のつむことは、強ち遠い將來でないかも知れんが、その大成までは少なくとも敵機を威嚇する楽山子の用をなすであらう。尙ほ人の搭乗し居る機關飛行機でも、操縦者に戦闘の能力が無く勇氣なきもの、乃ち支那あたりの飛行機の如きは空中の楽山子と見るべきであらまいか。

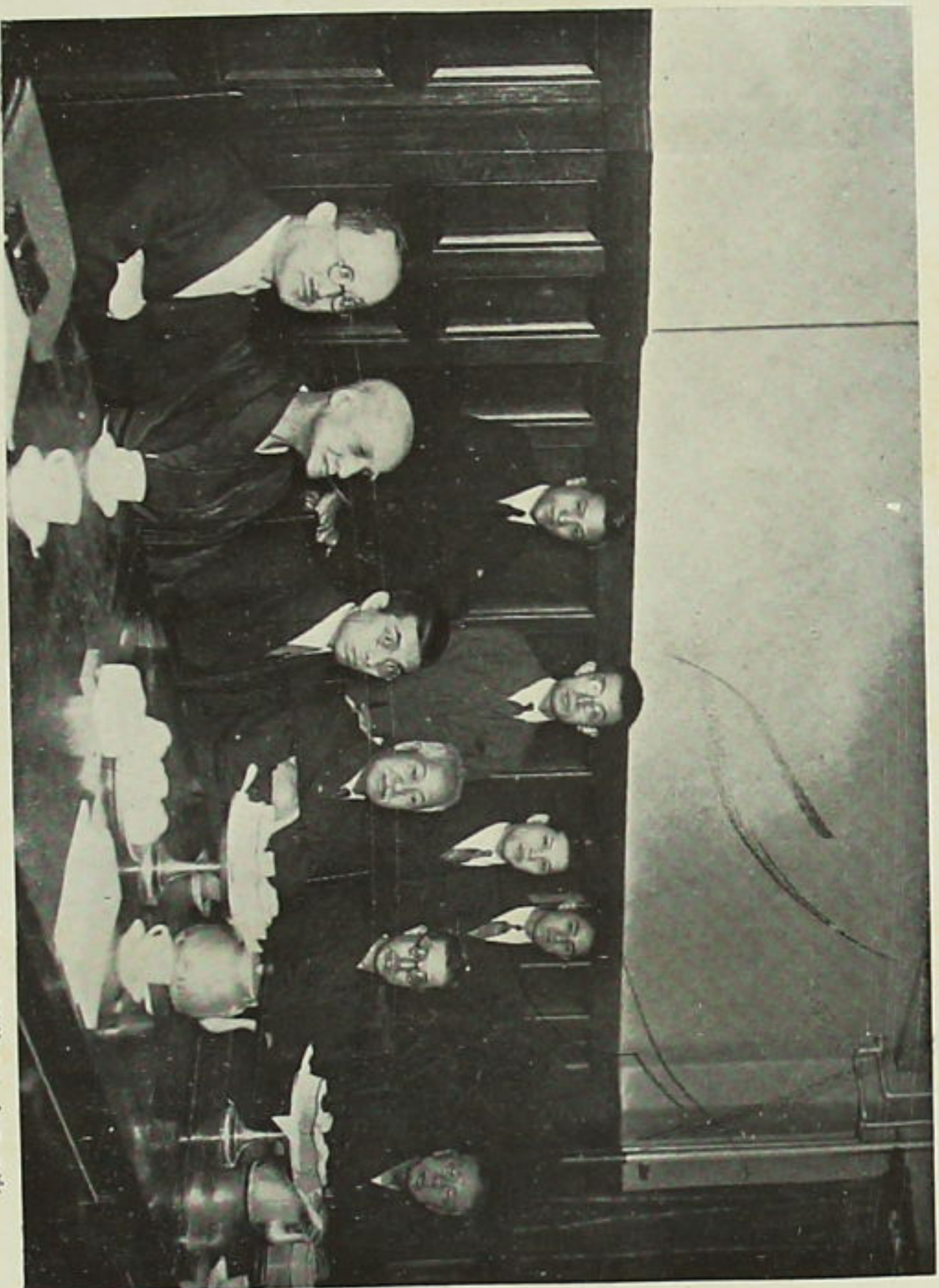
更らに眼を轉じて社會の人事を見て、吾々は楽山子がまだ訓法がられてゐるかと思ふ。それは何うかと云ふと動物の低い人を團體の中は楽山子に齊しいものがいくつもある。その人は初期こそあれ、今は働かない人である。亦散て働くことを書つて其局面に當つてある譯でもない。之れを懲ぐものは曰く、閣下の信望が大切である、何もして下さらんともしよしい、唯だお名前が大切だ、その聲響の餘災を自當に押し立てゝゐる

敵を不命に討つては  
 あるまい、僕に  
 功徳を授けよ、  
 功徳を授けよ、  
 功徳を授けよ、



Handwritten notes in Japanese characters on the right edge of the book's cover.

會談座「味極物書」



列前リ上右ニツ向  
一 藤澤仁 一 藤澤仁 一 藤澤仁  
古澤島市 古澤島市 古澤島市  
郎次喜山安 郎次喜山安 郎次喜山安  
岩崎宮徳 岩崎宮徳 岩崎宮徳  
馬一瀬川 馬一瀬川 馬一瀬川  
榎兵久田吉 榎兵久田吉 榎兵久田吉  
氏諸郎左仙木並

昭和七年十一月五日 於神田二橋教育會館

# 「味趣物書」 會談座

日五月一十年七和昭  
館會育教 橋ツー田神於

者 席 出

(順 ハ ロ イ)

早稲田大學 名譽理事	市島謙吉
東京日々新聞社 社 員	徳富猪一郎
東京文理科大学 國文學研究室	川瀬一馬
朝倉屋主人	吉田久兵衛
賞 業 家	安田善次郎
宮内省圖書寮	橘井清五郎
本社側	庄司淺水

前々より他すべくして催し得なかつた書物趣味の座談會も、徳富、市島、安田の三氏の如き、本邦著名の愛書家を  
はじめ、書物關係のお仕事に従事せらるる橘井、川瀬の兩氏、それに、古本界の著者、朝倉屋老主人の御出席を得て  
茲に、「書物趣味」座談會を開催し得るに至つたことは、小社として最も光榮とし、且つ誇りとするところである。  
御多忙中にも拘らず、小誌のため、御出席下されし前記諸氏に對し、茲に重ねて感謝の意を表する次第である。

庄司

大變時間が遅くなりまして申譯ございませぬ。今日はお忙しい所、態々お出で下さいまして有難く御禮申上げます。書物趣味の座談會と云ふことでございませぬが、書物に關しまして色々御経験なり、面白いお話又は珍しいお話などを伺ひたいと思ひます。大體プランは立て、参りましたけれども随分足りない所があると存じますので、どうぞ其の點お教へ願ひたいと思ひます。第一に此處に御出席の方々は、皆様御本がお好きでゐらつしやいますけれども、本好きになられた動機とでも申しますか、生れて直ぐといふ事もありますまいけれど、生來好きだと云ふ方もございませう——又は何かの機會で好きになつた方もあらうと思ひますので、其の點を一つ伺ひたいと存じます。徳富先生、どうか一つお願ひ致します。

て、よく城下から代官や何か出張して來ますと、私の家の書物を借りて讀んだと云ふことを覚えて居ります。所が、私が明治十九年に家を舉げて東京へ参ります時には、其の本を持つて來てはともやりきれない。すつかりそれを賣るなり呉れるなり、それから多くのものは、餘儀なく茶碗や何かを包む爲に本を毀したり、大概さう云ふやうなことをして、自分の好きな本だけ持つて來た譯であります。其のうちに段々自分の讀む書物が集まつて嵩を張るやうになりました。色々考へて見ると、矢張り書物の中にはよい本もあり、悪い本もあり、贅澤が出て來て、成るべく紙の綺麗な本が宜しい、字の鮮明なものが宜しい、書物と云ふものは矢張り繪を見ると同じことで、各々其の品質にも差別があると漸く分つて來ましたのは、もう三十代になつてからのことで、それ迄は無我夢中で讀んだのであります。其の中に友達から貰つたものとか、先師の持つて居られたのを貰つたものとか、親のものと云ふやうな

ものを少し區別しただけで、あとは別に何にもやりませぬでした。それ迄は唯だ自分が子供の時から讀んだ書物だけは愛着を覚えて、それだけは少し大切にすゝる気分がありました。三十過ぎてから初めて書物と云ふものは愛すべきものと云ふ感じが出て段々書物に對しての愛情、と云ふものが初めて出て來ました。それから段々世間を眺めて見ると自分ばかりでなく、世の中にもさう云ふ人が居ると云ふことを漸く發見しました。尤も、私にさう云ふことに就て、刺戟を與へたのは矢張り内藤湖南先生だらうと思ひます。内藤先生が朝日新聞記者か何かして大阪に居られる時分に、内藤先生を訪ねて行つたことがあります。それから途病みつきの因は、正平板の論語の翻刻本や何かを求めて、成る程かう云ふ面白いものがあるのか、何だか善本に値打があると云ふ感じがして、同時に雲臥紀談と云ふ五山版の本を大阪で買ひました。正平板論語の翻刻本は京都で買つたやうに覺えて居ります。まあさう云ふ

授から自著の書籍や何か買ひまして、成る程、是はかう云ふものは、大切にしなければならぬと云ふやうな感じがしました。それから段々昂じて來ました。右は歐文に關する書籍についてであり、和漢書に就いては前に申上げた通りであります。それから我等の恩人と云ふてもよいのは、本屋の諸君であります。例せば此處に居られる吉田君のお父さん、吉田君、京都に於ける山田茂助君、鹿田君の御先代、齋藤君の先代に隨分教へられました。茲に齋藤君の先代、齋藤兼藏君、即ち、世間で池ノ端のバイブルと渾名したる琳琅閣主人に教へられたことを一口申しますが、徳富先生名を後に傳へる道をお教へしませうかと云ふので、何だと云ふと、よい本を買つて貴方の印を捺して置けと云ふのです。それでかう云ふ(三寸四方位のもの)印を彫つて捺しましたが、幸ひ其の印は大正十二年九月東京大震災で焼けて了ひました。

庄司 お捺しになりましたか。

ものが段々昂じて來たのであります。且又た明治二十九年歐米漫遊の際、大隈侯爵から當時我國駐劄華國公使サー・アーネスト・サトウ氏に紹介をして頂き、同公使より、オックスフォードのボードリアン・ライブラリー (Bodleian Library) の副主任をして居るマダンを紹介をして貰つたのであります。マダンには書誌學の大家で著書も大分あります。其の人がボードリアン・ライブラリーを案内して色々書物を見せて呉れました。それから羅馬に参りまして、ステールマンと云ふ此の人はタイムスの通信員であります。ラスキンの友達で、亞米利加人にしては學者でもあり、美術其の他に趣味がある人です。其處でケルムスコット版のチャイサーや其他色々なものを見せて貰ひまして、成る程書物は莫迦にすべきものでないと思ひました。亞米利加新英州のケンブリッジに参りまして、カーライルが米國第一の紳士と申しました。ノルトン教授に面會しました。此の人はカーライルの友達であります。其の教

徳富 捺しました。紫檀か何かの大きなものに彫つて貰ひまして、齋藤老人から教へられて名を後に傳へるのには之に限ると思ひましたよ。(笑聲)

庄司 安田さん一つお願ひ致します。

安田 私は子供の時分に本所に住つて居つて日本橋の小學校に通つてゐました。其の行く道に濱町の花屋敷と云ふ處に「京常」と云ふ店は小さいが珍本を持つて居つた老人が居りました。その店先に芝居の番附のやうなものや何かぶら下げてありましたので、小學校に通ふ往復に、必ず其處に立止つて見て居りましたが、それが本の好きになつた初めだらうと思ひます。

徳富 幾つ位の時ですか。

安田 十二、三歳位でございませうか。其の後蒐め出したのは日清戦争の前後ですから明治二十七、八年の頃でありましたらう。其頃は京常へも参りましたし、其の外浅倉屋、齋藤にも参りました。村幸へ行つたのは京常が死んだあとと思ひます。私は學問もござ

いませぬし、難しい本も読ませぬので初めは軟かい本ばかりを買ひましたが、段々後には硬い本になつて、震災後は一變して軟かいものはなくて、硬いものばかりになりました。本を集めました動機としてはそんなものでございます。

徳富 随分硬い本もお古いやうですね。

安田 硬い本に手を出し始めましたのは大正にはいつてからと思ひます。

庄司 市島先生に一つ……

市島 何が動機で書物好になつたかと云ふやうなことは、自分で會つて考へて見たことはありません。今お問があるので初めて考へる位だが、幼少の頃のことなどは、今考へても何が何んだか分りませんが、或はこんなことが、知らず／＼自分を書物好きにしたのでもあらうかと思ふことは、私の家の隠宅に曾祖母がゐまして、そこには名所圖會がいろいろありました。曾祖母はかつて江戸見物に出て、東海道木曾などを旅をし

うも是は惜しいものだと思ふものがありました。それは平凡なものでありました。一は左傳、もう一つは八大家文でした。平凡の書物ではありましたが奉書摺如何にも上製のものでありました。献上本とも云ふものでありましたらうか、其後あんな立派な本を見たことはありません。それを見まして惜しいことをしたと考へましたのは、私の幼少の心に萌した書物慾の動いた初めであるのです。

徳富 それは幾つ位の時ですか。

市島 十二、三です。それから遊學時代には書物が好きで時々それが爲に借金するやうな事がありました。先刻から段々お話もあるやうな譯で、實は書物屋から大分黨陶を受けた譯なのです。此の頃一寸何處かの雑誌に書く積りで書いて見たのですが、それは「古本屋」に就てゐあつて、本屋はなか／＼大切な役目をするものであります。書物屋の店頭に行つて教はる事が少くありません。絶版とか、異版とか、誰々の書入本だ

たこともありましたので、名所圖會を披てはいろ／＼説明をして呉れました。その説明はウハの空に聞いたのですが、江戸名所圖會の日本橋の雑踏の處や京都名所圖會の祇園祭の賑ひの處などがおもしろくつて、毎日々々隠宅へ出かけて、いろ／＼の名所圖會をヒツクリ返して玩んだものです。今でも名所圖會はすきですが、或はこんなことが私に書物の趣味を教へたのであるかも知れません。尙私の幼少の時分に家の近くに漢學の塾がありました。私も其處の一番幼少の塾生でありましたが、是は明治初年のことであります。其の時の先生は星野恒と云ふ人で後の文學博士で、帝國大學の教授をやつた人であります。越後の人で鹽谷岩蔭先生の塾頭であつたのが、歸つて來て教へたのであります。家には藏書も相當ありましたが、塾の開けました時が丁度御維新になつたばかりと云ふやうな時でありましたから、家にある書物などは無用の長物のやうに考へて塾へ寄附をしました。其のうち二、三點ど

とか云ふものは圖書館に行つて、貸出掛などに聞いた所で分るものではありません。さう云ふやうなものは書物屋に行つて知るより外に方法がないのであります。私は或る時代に病後爲すこともなく朝飯を了ると、池の端の琳瑯閣へ出張したものです。そして晝飯をそこで喰つて終日書物を漁つたものです。彼處は座敷があつて、丁度俱樂部のやうなもので、其處に甲乙丙丁が集まつて雑談で時を費しましたが、實は彼處で目新しい本が出て來ると、眞先にそれを見て、その優先權を得たのです。そんなことが毎日であつて、それで大層興味を感じた譯です。色々な人が打寄つて書物の話をしますので、それに依つて幾らか教はつたこともあります。亦琳瑯閣の主人も毎日さう云ふお客が行つていろ／＼の話を聞かれますので、主人も段々學問をした譯です。随分客よりも教つたに違ひありません。或る時金襴表装のお経がありました。それは良辨の書いた紺紙金泥經で、西村兼文の模造したのですが、

同じものを三千圓で、井上侯爵が買って居られると云ふ話を聞いて居るものだから、好奇心が起つて幾らだと訊いたら七圓と申しました。何と云つても七圓位の値打はありますが、少し譯があるから三圓に負けて呉れと私から申しました。元來私は負けて貰ふ事は好かないのでありますが、さう云つたのです。すると老人はどう云ふ譯か分りませぬが、毎度御厄介になつて居りますからと云ふて負けて呉れました。私は是が三千圓で井上侯爵に行つて居るのだが、俺は貧乏だから千分の一の價で手に入つたと笑ひました所、老人も成る程と云つて居りましたが、さう云ふ事があつてから或る時又行つて居りますと寫經が一つ出たのです。其の寫經は天平の變りものと思つて買ひますと、或る時博物館の黒川眞道杯二三人が遊びに来て、是を見て、これは大變なものだと云ふ、そこで博物館で研究して下さいと渡しますと、それが白鳳經であることが知れた。其の經の來歴を申すと法隆寺から例の田中伯から

た。そんなつまらぬ話もありますが、私が大阪へ時々参りました折、ある時鹿田の店で、藤井竹外の詩稿を得たことがあります。これは三十六家の詩人の評の入つてある草稿本で、自分は初穂時代に竹外の詩を愛誦した關係から、食指が動き、それを手に入れて嬉しく思ひました。私はいつも會心の書物を買つて家に持ち歸へるとそれを珍客と呼んでゐます。夜分などは其の珍客を寢室迄伴ひます。珍客を寢室に連れて行くのは書物以外にはありません。話は戻つて又琳瑯閣のことになります。或る時可笑しい話がありました。琳瑯閣主人が眞面目に毎々御厄介になつて居りますから、今日こそ何か厭じますと云ふのです。それは有難いが僕は貰はんでいいから大學の圖書館にやつて呉れと云ひますと、それではさうしませうと、薄葉の群書類聚是は五六冊足らないものでありましたが、それを呉れました。内々譯を聞きますと、前日朝吹(英次)さんがお出になりましたので、コンナ安いものがありま

早稲田大學が頂戴して、此の頃國寶になつた、皇侃の禮記の義疏と同時に出たもので、琳瑯閣主人もそれほどのものと思つてゐなかつたのですが、日本最古の寫經で國寶となるべきものであります。私は之れで喜びましたが、馬鹿なことにはそれが私の手を離れませんでした。今は故人になつた私の友人に小川爲次郎と云ふのがありました。安田さんの御厄介になつて大阪で仕事をして居た人であります。此の人が切りに古寫經を集めてゐました。私が行くとき自慢してそれを出して見せますので、よせばよいことに、私が君は天平經位を珍重してゐるやうでは、まだ乳臭を脱しないと大言を吐いたので、小川はどこにこれより以上のものがあるかと申しますので、差當り俺の家に来て見よと答へますと、君の家にそんなものがあるかと云ふて聞もなく東京へやつて來ましたが、今の白鳳經を見せすと成る程と云ふやうな譯で大いに感心したので、そして法螺を吹いた紫りて到頭それを持つて行かれて了ひまし

す。早稲田に御寄附になりませぬかと申すと、幾らだと仰しやるから百圓と申しましたら、直にお買ひになりました。と云ふのが本音であつて、人の財布で私に義理を立てたので私も笑ひました。琳瑯閣主人は妙な男で座敷に行くとき桐箆があつて其處にいろ／＼のものが仕舞つてあります。是は賣り物でないかと云ふて中々見せないのです。毎日行く客は何か賣物があるに違ひないと云ふて、見せろ／＼とせがみましても容易に見せません。到頭毎日行く關係から私の見出したものは、白石の草稿が出て來ましたので、私と狩野君が買ひました。此外に何んとしても譲らないものがありました。それは狩野繪齋の二顆の印で一つは藏書印ですが、これだけは何としても譲らない。何でも構はないから、自分の考へるお客様に上げるのだと頭張るので、その意中の客は誰れか、中原の鹿は誰れの手に入りするかと競つたものですが、それが幸に私の手に入りました。先刻蘇峰先生のお話にもありましたが、名家

の印が押してあると書物の権威が高まるので、私の所へ動々もすると版齋の蔵書印を捺して下さいと云つて来るものもありますが、それは止せ、私は捺す事は構はないが、どうもさう云ふ事をやるのはよくないと一遍も捺した事はありません。また琳琅閣主人に就いてありますが、なか／＼妙な男でありまして、或る時大部の寫本體類典を買つて来て、いつもと違つて先生どうも濟みませんが、之を買上げて下さい。代金は今年でなくてもよい、三年位掛つてもいいのですからと云ひます。幾らだと云つたら五百圓と云ふのです。其の時は早稲田も貧乏時代で五百圓の支出は容易でなかつた。折角三年位掛つて拂つてもよいと云ふのだから買はうと云ふので話がつきました。そして暫く経つてから行つて聞いたのですが、幾らも儲けてゐない、十圓位しか儲けてゐない。どう云ふ譯かと段々聞いて見ますと、何とか云ひましたね、さう／＼稲田政吉と大いに市場で争つたさうです。其の爲に百圓ばかり餘

一方をやつて居りました。その時は古本屋の市といふものはございませぬので、交換市で自宅へ入札を致しました。常市は只今の出版屋さんの市でございませぬ。店の者は使ひにばかり出て居り、偶に店に居りましては商ひばかり致して、書物の研究などといふことは少しも致しませぬでした。店が忙しいので只今の雑誌屋さんと同じでございました。

市島 お父さんは幾つばかりで亡くなりましたか。

吉田 八十三でございませぬ。實はあれは皆様、私の養父と思つていらつしやいます、さうではありませぬ。私の養父即ち九代目淺倉屋久兵衛は明治二十七年三月二日、五十二歳でなくなり、その養父の八代目が八十三歳まで生き、明治三十八年三月二十二日に亡くなりましたので、誰方様も私の養父の事はよく御存じなく、養祖父を私の父と思ひになつていらつしやいます。

安田 珍書を置かれたのは貴君の代からですか。

吉田 左様でございませぬ。

計出して琳琅閣が買つて来たのださうです。併しそれがいつまでも店に轉がつてゐては自分の顔が立たない。右から左直ぐに片付いた所を見せたいと云ふので私に頼んだことが分つた。琳琅閣主人は俺れの男を立てゝくれたと云ふて私にサン／＼禮を申しました。琳琅閣とは深い關係がありましたので、齋藤の葬式には特に臨んだやうな譯です、私は一向本は分らないのでありますが、本を好む事は色を好むより甚しいのです。(笑聲)

庄司 大變結構なことをお伺ひ致しまして有難うございました。今色々齋藤琳琅閣の御先代のお話も出ましたが、一つ、こんどは吉田さんに淺倉屋の御先代文行堂さんの御先代、村口さんのお話など、名物本屋さんを一通り御紹介願ひたいと思ひます。

吉田 私が今の淺倉屋へ参りましたのは十七歳の時でありませぬ、其の時は書物問屋と申しまして、出版屋さんと同じで、店には珍書がございませぬで、小賣

徳富 前は佛書をよくやつて居りましたね。

市島 何時か遊びに行つた時に、色々故人の話が出た。老人の話に寺門靜軒杯云ふ人はいつもアグラをかけたが、極めて沈着でちやんと行儀よく坐り少しも座を崩さない人は種彦であつたと云ふ話を聞きました。

吉田 明治十二年頃には史記なんかよく賣れました。漢籍は盛んに賣れたものでございませぬ。偶に手前が種彦、枚齋、美成等のものを買つて来ますと、雜學者のもの等買つて来ては不可ないと叱言を云はれました。

市島 珍本は餘り扱ひませぬでしたね。

吉田 左様でございませぬ。秋山經太郎と云ふ初代の東京高等師範學校の校長をした人の拂物を受けまして、其の目錄を拜見しましたら、著者から年號からすつかり丹念に書いてありまして、それを手前が目錄を自分で拵へませうと思つて、夜分清書して分類致したりし、それが年來段々溜り、今日の目錄の土臺となつたのであります。

徳富 お宅に佛書があつたのは一度に買込んでお置きになつたのですか。

吉田 先代岡田屋嘉七さんが亡くなられてから買つたのでございます。此の老人は中々勉強家で、先代の話でございますが、小僧を伴れて東京中の木屋を歩き廻り、必要なものは買上げて置き、お客様が来られるとお断り申すのが残念で、皆な應じ得るやうにして置くといふやうな譯で、佛書も随分ございまして、そんなわけで店には皆な揃つて土蔵も三棟からございまして。

市島 長谷川泰君は熱心に佛書を集めたものです。

吉田 あの方は済生學舎の舎長をなさつた方で、東京醫科大學を向ふに廻はして、堂々とやられました。本はともにお好きで、文行堂さんの先代や珠環閣の御先代など、大變御最負になりました。たしか湯島天神の境内には銅像が建てられてある筈です。

注司 安田さん、村幸に金川でございまして、三軒を建てて

へるのです。日本橋の堀津と云ふ茶商今でもありますが、その舊藏の番附がありました。随分よく揃つて居りました。それを村幸が古いものと新しいのと分けて行李に二つしまつて居つたのです。其の時に幾らだと聞いたのですが、古い方は非常に高い。新しい方は安い。どうも度々行つて居るうちに、先づ新しい方を先に買はうと思つて、或る日意を決し、今日は思ひ切つて新しい方を買ふから出して呉れと云ひましたら、二階から汚い行李を下して来ました。金を拂つて家に持つて歸つて開けて見ると、それが古い方なのです。暫くして村幸に行つて此の間、間違へはしないか、此の間寄越したのは古い方ぢやなかつたかと聞いて見ましたら、周章で二階から下しましたので、古い方を間違ひて差上げてしまつたのですと云つてゐました。仕方がないから序に新しい方も買つて呉れませぬかと云ふので新しい方も安い値段で買つて割合に村幸の品としては安く手に入りました。

さいませんが、番付かなんか大變安くお買ひ求めになつたといふお話を一つ、御聞かせ下さいませんか。なんでも一度聞くといけないので、何遍も聞いて居る中に、最初は高かつたのが、安くなつたりしたといふことがあつたといふ話でしたが。

安田 村幸では帳面には附けてありますが符帳は附けてないのです。それですから行く度に値段が違つてゐる。初め私はさう云ふ事は氣が附かず居つたのですが、値段が高いから此方も思ふやうに買ふことが出来なつたのです。其のうちに此方も研究して、一冊二冊づゝ買ふよりも十冊なら十冊纏めて買ふと安くなると云ふことを知つて、行く度に欲しいものがあれば、細かく是は幾ら〜と値段を聞いて置いて、何時か安い時がありますから、さう云ふ場合に十冊なり二十冊なり纏めて幾らと云ふと又安くなるのです。合計して三十冊のものなら十五圓とか、十八圓とか、それで

吉田 齋藤の先代は和書が嫌ひで、和書の拂物が出ますと直ぐ呼びに来られました。やはりそつくり買つて呉れと仰しやいます。其の中から二三冊除きましても、値段は全額でございます。ちつとも引いて下さいませぬ。そこで段々覚えて、了ひには要らないもの迄一緒に頂いて参りました。

市島 古い醫者で岡と云ふ人がありました。其の人の醫書が山なす程澤山出たのです。が、よいものもありました。丁度圖書館の方に醫者の本が少い時でありましたから、一部一圓と云ふので盛んに選擇して、二百圓ばかり買ひました。早稲田に醫書があるのはその爲です。中には稀觀のものも多くあります。此醫者の藏書が其後亦出ました。それを自分は大膽に一括百冊ばかりを五圓で買つて調べて見ますと、極齋の自筆本と東條琴臺の自筆本もあつたので大いに喜びました。

(以下次號)

芳ちりまゝにさかして  
 女はも今より大人も  
 せめて記憶をたゞるる  
 の二三とて、遺漏を代  
 のの補綴をたゞるる云  
 實業日本所載  
 故紙の修業

越後市島家の來歴

越後の大地主 落々生

越後名物豊米搗と角兵衛獅子とならんや。縣下到處の石油坑、そが一年の産出價格無慮四百萬圓と稱す、越後は正に「鑛業の越後」にあらずや。小千谷の縮、杉尾の軸、山邊里

及五泉の袴地、所謂越後の絹織物は漸く世にその眞價を認められんとす。越後は遂に「工業の越後」たらんとす。然れども越後は由來日本一の大米産地也、その實收額半年にして約二百四十萬石、越後の富を見んとするには、先づ米を算せざるべからざる知るべきなり、然り越後は古より農國として其名天下に高し、越後は到底「米の越後」なり。随つて越後に在て最も福の利くもの「大地主」に若くものなく、人はこれを越後名物の隨一に數ふ。

天下は廣し、大地主は多し、單り越後の大地主のみ他府縣のソレに比して、寧ろ特殊の性質と勢力とを有するやの越あるは、別に歴史上の原因あるに因る。蓋し越後は全國屈指の大國なれども、古來一霜山公の當時を外にして、他地方に多く見らるが如き一大藩の、一國を擧げてこれを領有し得たりし者あることなく、殊に幕政の時代に在ては、藩領大の領地を有する幾多の小藩國內に分立して、互に版を張り眼を怒らしたるのさまは、宛として關東の背戰の的なりしに、加ふるに天領若くは旗下其他の采邑と稱するもの、その間に介在して犬牙錯綜、一郡内に在てすら甲地と乙地と丙地と丁地と各その主を異にするものありき、かゝる制度の自然の結果として、一方には藩主の勢力をしていよいよ微弱ならしむると、他方には地主なるものをして不知不識の間に一大僭勢力を養はしむるに至り、果てはその大藩主と稱する者も實力に於て到底大地主の豪なるものに及ぶ能はず、封建諸侯の權勢を以てして、大地主中の或者に對しては遂にこれを奈何ともする能はざるの既あり。實に日本全國を擧げて滔々と

士本位の世なりしが中に、單り北陸の一桃源のみは、に於て地主本位たるかの觀を呈せり。幕政の當時に於て既に此の如し、況んや王政維新の後に於てをや。これ「越後の大地主」が他地方に於ける所謂大地主なるものと自ら撰を異にし、別に特殊の性質と勢力とを有するに至りたる所以にして、又従つてこれを越後名物の一に數ふる者ある所以なり。

吾人はこゝに所謂「越後名物」中の名物、所謂「越後の大地主」中の大地主、而して北陸隨一の名家として知らるゝ、市島家一門の來歴を叙し、その家憲を説き、更にその家庭の一斑を世に紹介せんとするなり。

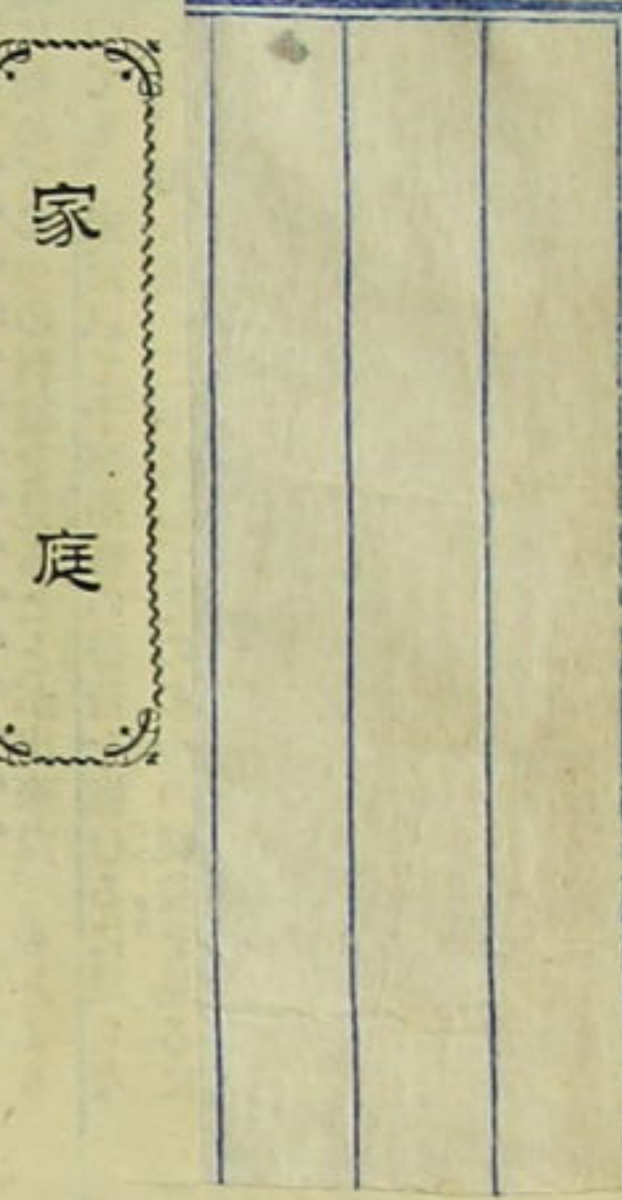
市島家

一萬圓以上の地價を有し所謂「越後の大地主」として算せらるゝ者現に四百六十三人、而して市島家はその最も豪なる者也。新潟縣下一市十六郡、就中北蒲原郡は素封家の巢窟を以て稱せらるゝ、多額納税者にしてこの郡に住するもの實に八人而して市島家はその最も雄なるもの也。若しそれ水原街道を新發田に到る、水原よりして二里天王村の村端に、舊者たる森林と潺湲なる小河流とを以て自然の境界を畫せる一大邸宅あるを發見すべし。老杉亭々として自らなる四圍の光景、高崇にして又た幽雅、こゝに繪造りの一巨門建つ、先づ門前に架せられたる石橋を渡りて眼を門標に注ぐ、榜して曰く「市島徳次郎」と、實に市島家一門の總本家となす。人若し水原新發田の間に於て、市島家の勢力如何を知らんと欲せば、試

市島家の發祥地

假令一部の地方、一部の人民のみにもせよ、之に對してかゝる勢力を有せる市島家とはそも何者ぞや。市島姓を名乗るもの之を全國に探めて多く得べからず、たゞ越後に於て頗る繁昌を極むるを見れども、市島氏は元來越後の人にあらず、三百年前新發田に移封せる溝口侯に隨從して、加州大聖寺より始てこの地に移住し來りたる者なり。而かも加州も亦市島家祖先の地にあらず、市島氏は初め丹波に在り、丹波國上田郷その實に市島氏が始めて興りたるの地なりといふ。今支福知山を距る數里のところに「市島」と字する地あり、阪鶴鐵道に停車場を設け市島驛と名づく、乃ち市島家發祥の地として知らる。丹波志に曰く「市島に吉見氏あり、市島は上田郷の支那の次男吉見三郎資重、丹波國鹿集郷に移り、其の裔孫式郎少輔則重、天正十年明智の兵に破滅せらる」と。市島氏と吉見氏との關係は今詳かならざれども、思ふに市島氏は元と上田の豪族として吉見氏に屬せしもの、吉見氏の滅ぶるに及び、更に雄を丹波但馬の間に稱する者を求めて溝口氏を得、進んでこれに屬したるもの歟。爾來固く溝口氏と進退を共に





### 越市島家の來歴

遠祖、産を子弟に分つ 落々々 生

慶長三年溝口氏の移封に伴はれて、加州大聖寺より越後に移住せし當時、市島家に主たりし者を治兵衛と稱す、傳ふる所によれば治兵衛一門の子弟に富む、以て爲く、將來の繁榮を増し、市島家の富を以てこれに萬世に傳へんとせば宜しく子弟分家の方法を採り、彼等をして各自の産を治めつ、永く相競争し相脅せしむるに若かずと、乃ち先づ居を五十公野に卜して、一門宗家の基礎を定め、更に産を分つこと差あり。各水原芝田の間に於て買業を營ましむ、分家の數實に九戸、分資額の最少なりし者にして五百兩以上と家に傑出せるのみならず、又實に越後隨一を以て目せらるゝに至りぬ。これ所謂陰徳有て陽報を得たるもの耶、於是乎一門相讓し、更に水原市島家を以て宗家と稱し、一族の長者として尊崇することなせり。今の市島徳次郎氏の家これ也。

### 現宗家の祖

次兵衛の長子喜右衛門既に家を季第六之丞に譲り、水原驛に移りて買業を業とす、實に今の天王市島家の祖となす、喜右衛門資性活潑頗る俠氣あり、好んで人の急に赴く、後年喜右衛門の曾孫俗海堂の筆に成れる市島家碑文の一篇善く喜右衛門の爲人を悉せり、曰く『我曾祖備任俠人愛し、然して權貴以て人を驚する者を顧みこれを面折す、落魄の者の危急を救ふに至れば則ち己が貴産を顧みず、寒者は之を衣せしめ、饑者は之を食せしむ、家人或は怖へば必ず痛くこれを杖つ、最も乞丐を看み、日々婢をして草粥を炊かしてこれを嘔はしむ、一日これを炊かざれば怒て菜刀を揮てこれを鞭つに至る、故人某困乏して逃ぐ、即ち駈歩をして趁ふて佐邦に踵らしめ、而して錢粟を予へて故業に就き妻子を畜はしむ』と、彼れは此の如くにして老を憐れみ窮を救ふもの擧て數ふべからず、隨つて喜右衛門の俠名徧く四方に傳ふ、既にして老を以て退き、嗣子權之丞繼ぐ、亦豪邁にして遊俠を好み、四方の俠客多く門に入らず、權之丞壯年にして子無く且つ父に先ちて没す、喜右衛門乃ち季第六之丞の次子次郎右衛門を養ふて嗣となす、乃ち水原市島家第三代の主人にして、また

△正誤 前説本營、市島家が「市島が」、霜山公は霜台公の誤植

なす、それ三百年前の當時に在て、一門九戸に各大枚五百兩以上づゝの資を分ちたるが如きは、今にして尙ほその富力を想はしむるなり、而して後年市島氏の一族が幹支愈々蕭々、浦原平原に於ける一大豪族として、殆ど封建諸侯を凌ぐの勢を成したるもの、實に移住當時に於て早く既に子弟分家の策を立てたるに由來せずんばあらず。

### 宗家亡びて宗家興る

移住後第三代の主人亦治兵衛と通稱す、仁義博愛深く郷黨の折衷する所となる、寛永五年歿す、四男一女あり、伯喜右衛門宜しく家を繼ぐべくして、而して季第六之丞性行克く類し孝悌にして蘊蓄四なし、喜右衛門乃ち家を六之丞に譲り、自ら水原に到りて藥舖を開き、仲叔亦芝田に避けて各商業を營み、共に六之丞を推して嗣となす、六之丞遂に入て宗家を繼ぎ勤儉よく祖業を守る、然れども時に盛衰あり世に消長あり市島氏亦この理を免かるゝ能はずして、六之丞の後凡そ數代にして家業頓に失墜し、遠祖治兵衛が一族の宗家として創めたる五十公野の邸宅は、何時しか一頃の蒼田と化し、當年榮華の跡復た探ねべからざるに至りぬ、然れども宗家の非運は市島家一門の衰亡を意味するものと誤解することなれ、否な、遠祖以來の遺風たる子弟分家の法は今にしてその功果を見、多くの分家中には宗家の非運に係らず、業いよく榮え、産ますく加はれるもの尠からず、中にも初め宗家を繼ぐべくしてこれを季弟に譲り、自ら水原に分家したる喜右衛門の子孫こそ、家運彌々目出度くして、資産の大獨り一門諸

### 第三代、大に産を興す

治郎右衛門五六歳の時出て里路に遊ぶ、會々溝口侯の老夫夫某驕中これを目し、人に謂て曰く此兒器宇異常、若し武門に在らしむれば伐閔遂に測るべからざるものあらんと、長ずるに及んで明敏にして奇才あり、先之初代喜右衛門の活達、二代權之丞の豪邁、而して共に遊俠を事とす、假令中道にして翻然改過産業に従事したりといふも、而かもこの際に於て家道の興隆固より多く望むべからず、治郎右衛門既に家を繼ぐや、先づ初代の通稱に因みて名を喜右衛門と改め、一門の興隆家産の増殖を以て念とし夙夜憂慮せず、祖業の買業は良奴を擇びて多くこれに任し、自ら四方に出て、親しく百貨の有無を察し、専ら海陸貿易の事に従ひ、妙算奇計常に人の意表に出づ、こゝに於て産大に興り實に先代に百倍すと稱せらる、治郎右衛門亦弘裕善く衆を容れ、雇役せる僮僕の如き賢愚となく總て其の所得せしめたりと云ふ、一賣家と唐様でかく三代目」とは後世川柳子の歌ふ所、しかも治郎右衛門に在ては乃ち此の如し、市島家の今日ある偶然にあらざるなり。

### 一門の子弟學に篤し

治郎右衛門また風采端麗、會て奥州の一温泉に浴す、相者あり曰く、君が富地氣昇り雨澤方無きが如し、且つ八男五女を得て益々家を興さんと、後果して八男相尋で生る、既に巨萬の富を累ね、また九族繁茂一家顯陸す、治郎右衛門乃ち一門染めたりとは、意地の圖中、これども、謂て思ふに、千吉年少家を受け、才敏にして氣鋭、單に守成の良主人とし、一生を終るを欲せず、一たび乾坤一擲の快擧に我が才の利鈍を試みんとは、家を受ける當時より早く既にその覺悟したる所なるが如し、然れども身は名門宗家の主人として祖宗巨萬の遺産を繼ぎ、更にこれを子孫萬世に傳ふべき重任に廣

生れ。無爲徒食以て生を終るあらば、これ尋常の賈豎、若し淫濁常を毀る如きは直ちに禽獸のみ、方今承平二百年、聖天子拱を九重に垂れ、海内悦服す、吾曹幸に奉封の榮を樂むもの、抑も誰の恩澤ぞや、汝等宜しく古人の道に遊び、徳を修め禮を習ひ除力詩書を學び、而して國家事有らば進んで犬馬の力を致すべきなりと、依て頻りに學事を奨む、於是一門翕然として學に就き、最も文事に長ずるもの五子葛陵(助次郎)八子岱海(次郎九郎)等あり、特に岱海堂の如きは一郷の孔子を以て自任し、徳高く學遂く、單り郷黨の崇敬する所となりたるのみならず、名聲廣く北陸奥羽の間に籍甚たり、岱海堂とは今の市島謙吉氏の祖なりといふ、此くて治郎右衛門勘五郎餘にして家を長子徳次郎に譲り、別樓を築いて退隱し自ら南山と號す、爾來閑かに子弟を誨へ、また徧く棋友に結び、悠々として晩年を終ふ。

三代目夫人の内助

治郎右衛門の夫人野崎氏、また有道にして貞淑、一身家政の處理と子弟の教養とを以て任となし、乃夫をして善く内顧の憂を絶ち安んじて家道に勤めしむ、天明六年官これを賞し字を賀宇と賜ひ、且つ白金一枚を下してその淑徳を表彰せり、蓋し第三代主人の事蹟を録するに當ては、夫人内助の功亦没すべからず。

第四代類りに家名を揚ぐ

第四代の主人徳次郎は先代の長子なり、明敏なる父は貞子門と、温慈なる母野崎氏との手に人と成り、謹格にして孝悌長じて志業小ならず而して文雅餘あり、よく家道を守りて産を生ずる益々大に、兄弟數人各家を分ち皆悉く千金を累ねこれより家名愈よ正しく、令聞遠く江戸に聞え、江戸の豪戶争ふて用を爲すに至る、天明三年幕府下總手賀沼の開墾に着手するや、乃ち金二千兩を獻じてその墾を助け、一族兄弟皆これに倣ふ、幕府奇として賞するに士格を以てし、世々苗字帯刀を許され三人扶持を給し、且つ道中宿驛人馬先驅を免さる、徳次郎内儉にして外禮、凡そ凶獸に遭へば率先一族と共にこれに救恤に従ひ、且つ穀價を卑ふして貧人に便す、故に郷人のこれを見る殆ど父の如し、曾て凶年に際し、金二百兩を岩船郡に貸して記せず、後年豊なるに及んでこれを償はれんとするも受けず、以て他年の凶荒に備へしむ、その德行概ね此の如し、然れども又た家道の興隆はその一日も忘れざりし所に於て、常に人を四方に派し、海内の富豪に就てその致富の由来を探らしめ、私かに自ら則る所ありしと云ふ、子千吉繼ぐこれを第五代の主人となす。

市島家第一の偉人現はる

第三代の主人は市島家中興の祖として見るべし、三代の事業は多く第四代を待て始めて完たく、家名の揚れるこの時を極れりとす、然れども父祖の遺業を大成し、この丹波加賀以來の名門の基礎を固め、果ては世人をしてこれを越後名物として歌はしむるに至りたるの功は、斷じてこれを第五代に歸せ

ざるべからず、思ふに第五代の主人はその一門に於ける功績の上より謂ふも、將たその人物の點より觀るも、確かに市島家累代中の第一流に推さざるを得ず、初め先代徳次郎男女十一子あり、千吉その第九子を以て出て、仲父治郎吉の養ふ所となる、既にして兄弟皆な天す、千吉遂に復た入て嗣子となる、實に彼れは

一族中の最少年者

を以て宗家を繼げり、乃ち名を徳次郎と改め、自全「徳次郎」を以て宗家當主の通稱たらしむ、この時に當て市島家の富實に八千餘石を算し、家名の隆、前代比なし、第五代の主人たらん者、唯だ勤儉法を守り、祖業を失墜するなくんば即ち足るのみ、彼れは實にこの理を知れり、既に家を受けて無爲無能、文墨を弄し吟詠を事とし、多く俗事に纏礙たらざるところ、宛として一介の貴公子のみ、郷人は彼れが時に方言ケンカン焼と稱する燒握飯を携へてその領内を巡行し、貧戸を訪ふて金穀を授ずるあるを見るのみ、彼れが小作人の情願を容れ、よく寛裕の爲に出づるものあるを知るのみ、皆な曰く我郷の聖人なりと、何ぞ知らんや所謂郷黨の聖人は、他郷に在て一大相場師として知らるゝの人なりしならんとは、(未完)

△正誤 前號本篇市島家が「市島」が「崋山」公は崋山公の誤植

越市島家の來歴 (三)

落々生

第五代主人の大秘密

大奸は忠に似、大惡は愚に類す、外貌に依て人を判するの難きは古今一轍なりと雖も、しかも遠祖以來連綿數百年、累代の素封たる名門の當主といひ、わけて生平文墨をこれ友とし、自から塵外に超然たるやの態あるこの貴公子、而してよく貧人の窮を救ひ、よく小作人の情願を容れ、慈善德行郷黨に比なきこの君子人にして、かの山師者の爲に學びて手を相場に染めたりとは、寧ろ意外の感に堪へざれども、竊て思ふに、千吉少年家を受け、才敏にして氣鋭、單に守成の良主人として一生を終るを欲せず、一たび乾坤一擲の快舉に我が才の利鈍を試みんとは、家を受ける當時より早く既にその覺悟したる所なるが如し、然れども身は名門宗家の主人として祖宗巨萬の遺産を繼ぎ、更にこれを子孫萬世に傳ふべき重任に廣

りながら、才を恃んで足を進道に不入、如きは、固り一族の非議を免かれざるを、彼れが常に文墨を弄し吟詠を事とし、多く俗事に携はるるを欲せざるの態を呈するもの、孰んぞ英雄人を欺くの手段にあらざりしを知らんや、而してその時に吟詠に飽きたるを名とし、焼酎飯を携へて、自然家を出て、數日を経て行く所を知らずと稱せられたるの一事、彼れが大秘密の寓したりし所に於て、千吉は實にこの間に於て、密かに隣國山形酒田の地方に到り、

### 米社の市場に輸贏を争ひ

つゝありしなり、而して彼れが無限の財力と非凡の才智とは、よく紛々たる相場師者流を壓するの概ありしもの歟、酒田地方の米社市場は、千吉の姿の現はるゝ毎に色めき立つを常としたりと傳へらる、千吉は此の如くにして財を攫むこと無數、その家を受けたるの當時八千餘石と算せられたるの所得は、今や實に數萬石を以て稱せらるゝに至りぬ、加之ならず、彼れは酒田地方往復の途次、常に自他の田圃を見て、米穀豊凶の實狀を熟知するが故に、他日小作人等の報告に接して一々その眞偽を判別し、觀察的中殆ど神の如きものあり、而して内部にかゝる秘密の藏せらるべしとは露知らざる市島家の小作人とその郷人とは、千吉が平生怒々吟詠に耽りて絶へて家事を顧みざるに拘らず、家産の却て先代に幾倍するものあるを見て奇となし、皆々曰くこれ尋常人のよく爲し得る所にあらず、彼れ豈聖人耶と、以て彼れが此の際に處して、如何によく秘密を保ち、又如何に手段の妙を極めたりしかを想ふべ

し、唯だそれ相場と謂ひ投機と謂ふ、由來恒産の以て家を支ふるに足るなく、常業の以て身を立つる能はざるの輩が、赤手空拳、成功を萬一に僥倖するの手段にして、その貨殖の常道にあらざるや論なし、乃ち貨殖の常道にあらざる、千吉名門の當主を以て敢てこの危道を踏む、幸にして異常なる成功を見たりしと雖も、然れども此の如きは要するに倖運を以て見るを可とす、若し千吉の眞面目に至ては、寧ろその後半世に於てこれを見るなり。

### 多額納税者が七八軒

千吉既に投機に依りて大に財を擧みられたるも、彼れは固よりこの倖運の成功に酔ひ、何時までも浮きたる榮華を夢みるの痴漢にあらず、實に彼れは思ふが儘の成功を收むると共に、水く身を投機の市場より匿くし、爾來専ら力を一門の基礎を固むるに致し、普く一族の勢力を扶植するに勉む、當時水原新發田の間に住居せる市島家の一族にして、現時の多額納税者以上の富を有する者、實に七八戸の多きに及ぶ、千吉乃ち大に一族を會し、議して一門の家憲を制定せり。

### 市島家の家憲

家憲の全文は故ありて今こゝに掲ぐるの便を缺くと雖も、試にその眞髓を示せば、

- 一、市島家一族に關する重大なる事項を議する爲め、一族會議の制を定め、必要に應じて隨機開設する事。
- 一、一族會議の會長は、家の本末、その財産の多寡、若く

### 家庭

### 越市島家の來歴

落落々生

### 現代徳次郎氏の性行

現代徳次郎氏は靜月翁の長子にして、弘化四年を以て水原の

は年齒の長幼等に關する事、一、族會議は一族各家の分限に應じて、每一ヶ年間の經費豫算を議決し、各家をして嚴にこれを守らしむる事、一、一族中身を放蕩に持節する者あるときは、一族會議はこれに對し嚴に臨機の處分を施す事、一、一族中の者に在て罪惡の最も重きを蓄妾とし、犯す者は一族會議の議決に依り、若干の捨て扶持を給して隱居せしむる事、

その一族に關する重大事は、總て一族會議の議決に依らしめて、獨斷專行を避けたること云ひ、一族會議會長の資格に、家の本末、財産の多寡、年齒の長幼等を無視して、單に才識と徳望とに重きを置きたること云ひ、將た各家一ヶ年間の豫算を定めてこれに依らしむるが如き、若くは蓄妾の弊害を認めてこれを嚴罰するが如き、當時に在てその思想の頗る進歩せしものあるを見るべし、家憲既に成る、千吉一族をして嚴に遵守を誓はしめ、且つ互に相戒勵し相督勵して家道の興隆に盡さしむ、蓋し市島家の産は元と累代の遺業に成ると雖も、然れども第五代千吉に至て大に發展せると共に、一門の基礎を大に至て全く確立するを得たりと云ふ、龜次郎繼ぐ、これを第六代となす。

### 第六代、大に土功を興す

第六代の主人龜次郎(改名徳次郎)は先代の第二子なり、豪放にして膽略あり、會て新發田侯溝口氏に召されてその居城に遊奉し、依て以て守成の業を全ふせんとを期するの人なり、故に氏が家業を受けて以來、市島家の事業として新たに經營せられたる所は、甚だ多からざるに似たりと雖も、然れども社會に對する當家としての責任に至ては曾て一日も怠りたるなし、その國家公共の事業に對して養金を寄せ、若くは天災地變の際に慈善救恤の舉に出づる如き、常に他に率先して範を郷黨に示し、縣下の富豪皆市島家を以て標準となすことなし、例へば明治十九年皇居御造營費中へ金千圓を獻

伺候す、城や新發田町の北端に在り(今第十旅團本部)、橋高  
く深く、結構壯大ならずとも、然れども龜次郎見  
て以爲く、溝口氏所領五萬石を以て大諸侯と稱するも、  
居城の經營尚ほこれに止まれば、我家今民間に零落  
し威權の外に見るべきなしと雖も、實力豈彼れが下にあらん  
やと、意氣昂然私かにこれに顔頑するの意あり、會々天保丁  
酉歲大に饑へ米價湧起小民凍餓す、龜次郎曰く、我が宿昔の  
志を成し併せて小民の急を救ふ唯だこの時を然りとす、  
乃ち小民の自食する能はざる者を聚め、これに告げて曰く我  
先人曾て別墅經營に意ありて地を擇ぶ久し、幸に中島村中我  
家所有の地内に圃田あり、隱然として隆起頗る灌漑の便を欠  
く、依てこれを平にして以て彼の下條村の沼地を填め、こゝ  
に別墅を建てんと欲す、これ一は先人の志を繼ぎ、一は汝等  
焦眉の急を救ふの微意に外ならず、その雇傭の賃銀の如き宜  
しく倍して給すべきなりと、こゝに於て小民陸續としてこれ  
に赴く、龜次郎乃ち男女と老弱とを擇ばず、來る者は皆な役  
に就かしめ、且つ別に一人各米五合の割合を以て餉を給す、  
小民大に喜び以て城外に出づとなし相謂て曰く、嗚呼精悍な  
は飽くを得ず、今や白粲あり又青錢あり、仰いて以て老親を  
供養すべく、其餘以て妻孥を撫育するに足ると、感激して各  
々役に勤む、既にして臺の沼池は盡く膏腴の田と化し、所謂  
隆起の圃は變じて水田となり、相合して賦畝を同し一粟際  
なし、依て更にその中央形勝の地に高阜を築きてこゝに別墅  
の基趾を作る、版築漸く終りて屋宇を造營す、役を起してよ  
り大凡五年餘工始めて竣る、結構雄大宛として諸侯の居城、

而して輪奐の美はこれに過く。

群諸侯の嫉妬を招く

この時に當り、市島氏の貨力遙かに彼の所謂群諸侯の上に出  
づるものあるは、世の認めたる所なれども、しかもなほ彼れ  
は堂々たる大名にして、此れは眇乎たる一農民に過ぎず、  
此れが財力の大は固より未だ彼れが威權の隆なるに若かざり  
しに、今や市島氏大に山澤を壟斷し、その田圃を壟となし、  
その居宅を城となし、事實に於て勢力を群諸侯と争はんとす  
るものに類す、こゝに於て附近の諸侯は、今更に市島氏の財  
力の豊富なるに驚くと共に、又その僱上の輿動を議せざるは  
なし、況んや時は有名なる水野越州の勤儉令發布の當時にし  
て、而して水原地方は實に天領に屬するを、市島氏の豪華  
幕府に聞えざるを欲するも得べけんや。

幕府の糾問を受く

果然糾問の差紙は來れり、偶々龜次郎江戸にあり、郷里より  
の急使に接して直ちに越前守の邸に詣り、頓首謝して曰く、  
勤儉の教令嚴として犯すことを許さざるに、敢てこの土功を  
起す、萬死固より辭するを得ず、然れども我等豈豪華を街ひ  
分を忘れてこの工事を起したるものならんや、畢竟比年凶歉  
相次ぎ小民日に困窮す、我等微力を救恤に致さんとす、  
願みて安りに命殺を施與するの、徒に惰民懶夫に俾ひするに  
過ぎざらんを恐れ、こゝに土功に托して工事に與る者には雇  
料を倍與し、以て窮民を未だ溝壑に轉ぜざるに救はたるのみ

現代德次郎氏は静月翁の長子にして、弘化四年を以て水原の

市島家の來歴

後越 市島家の來歴 (五) 落落 々々 生

如し。之を要するに甲青年は實力の重積を以て最後の天變者  
たるべきものなれども、乙青年は實力の散布を以て徒に其占  
面を空漢に終らしむ。吾人は今此二個の青年の容貌を髣髴た  
らしむるに於て、甲が奥深く莊重にして宛も滄淵に臨むが如  
きあるに對し、乙が眉蹙り頰尖りて其の性癖を顔の全面に發  
露し、急端石出で岩峙つに似たる觀あるを思はざるを得ず。  
何れより見るも甲青年の容貌風采は、深遠にして克制の表裏  
を有せりと雖も、乙青年に至ては廣野獨歩の自我心歴々たり  
と言はざるを得ざる也。人間成敗の跡又此二青年の品格に依  
つて、多くの由來する所を見ずんばあらず。サツカレ曰く  
「天は人の容貌に信任状を書したり、故に善良なる品性を有  
する者は何處に至るも世の尊敬を受く、此の如き人は人をし  
て自己を信ぜざらしめんとするも能はず、何となれば此如き  
人の容貌には「支拂ふべきとを約す」との文字記され、其信  
用は裏書ある手形よりも篤く且深ければなり」と。甲青年の  
如きは此不文の信認状を記されたるものといふべし。

富豪としての責任

自邸に生る、明治四年二月新潟縣第廿二大區天王新田御用掛  
を命ぜられ、十三年更に第廿二大區長となり、十八年北浦原  
郡天王新田外十二ヶ村戸長に轉ず、先之明治十年第四國立銀  
行の始めて新潟に設立せらるるや、推されてこれが第一回の  
頭取となり、廿三年新潟縣多額納稅者の互選に依りて貴族院  
議員に任ぜられ、第一期の七年間を無事就任したり、氏が公  
選の履歴は嘗て以上の如し、蓋し氏は諸格の人、その家道を  
受くるの後に雖も、静月翁の存生中は事皆乃父に謀りて取  
て專斷せず、而して乃父は由來「無爲」を以て處世の秘訣と  
爲し、亦實にこれに依りてよく守成の業を全ふしたるの人な  
り、されば氏も亦確く乃父の遺訓を守り、多く經營せず多く  
書策せず、たゞ勤儉自ら持し敢て進歩なきを期せず、これ氏  
が家業を受けてよりこゝに三十年なるも、市島家の事業とし  
て特に擧ぐべきもの、甚だ多からざる所以なる耶。

實にや現代德次郎氏は一に先代を模範とし、よくその遺訓を  
遵奉し、依て以て守成の業を全ふせんとを期するの人なり、  
故に氏が家業を受けて以來、市島家の事業として新たに經營  
せられたる所は、甚だ多からざるに似たりと雖も、然れども  
社會に對する富豪としての責任に至ては曾て一日も怠りたる  
なし、その國家公共の事業に對しては義金を寄せ、若くは天災  
地變に際して慈善救恤の舉に出づる如き、常に他に先んじて  
範を郷黨に示し、縣下の富豪皆市島家を以て標準となさざ  
ることなし、例へば明治十九年皇居御造營費中へ金千圓を獻

と、辭理共に明瞭、幕府尤めずして却てその篤志を賞す、これより市島氏の聲望愈よ加はれりと云ふ、後明治戊辰に際し、水原地方戦闘の衝に當り、この邸宅兵燹に罹りて全部島有に歸したるは惜むべし、役了りて新政府水原府を設けし事あり、時の主人一旦これを官に献じたりといふ、この邸址今は市島家の別荘として存せられ、戦時の餘燼を以て小亭を營み、轉た人をして當年の豪華を想はしむ（本號口繪参照）、一昨年閑院宮殿下水原御通過の御、この別荘に御小憩あり、戊辰の當時を憶はせられて低徊これを久ふし、紀念の爲に松樹を御手植あらせられぬ、子千吉繼ぐ、即ち市島家第七代の主人にして實に今の徳次郎氏の先代なり。

(未完)

水原府と云ふ  
 市島家の別荘

993  
 現代徳次郎氏は静月翁の長子にして、弘化四年を以て水原の

家 庭  
 市島家の來歴 (五)

現代徳次郎氏の性行  
 現代徳次郎氏は静月翁の長子にして、弘化四年を以て水原の

自邸に生る、明治四年二月新潟縣第廿二大區天王新田御用掛を命ぜられ、十三年更に第廿二大區長となり、十八年北蒲原郡天王新田外十二ヶ村戸長に轉ず、先之明治十年第四國立銀行の始めて新潟に設立せらるゝや、推されてこれが第一回の頭取となり、廿三年新潟縣多額納稅者の互選に依りて貴族院議員に任せられ、第一期の七年間を無事就任したり、氏が公邊の履歴は客以上如し、蓋し氏は體格の人、その家道を受くるの後に雖も、静月翁の存生中は事皆乃父に謀りて敢て專斷せず、而して乃父は由來「無爲」を以て處世の秘訣と爲し、亦實にこれに依りてよく守成の業を全ふしたるの人なり、されば氏も亦確く乃父の遺訓を守り、多く經營せず多く書策せず、たゞ勤儉自ら持し敢て違ふなきを期せり、これ氏が家業を受けてよりこゝに三十年なるも、市島家の事業として特に擧ぐべきもの、甚だ多からざる所以なる耶。

富豪としての責任  
 實にや現代徳次郎氏は一に先代を模範とし、よくその遺訓を遵奉し、依て以て守成の業を全ふせんとを期するの人なり、故に氏が家業を受けて以來、市島家の事業として新たに經營せられたる所は、甚だ多からざるに似たりと雖も、然れども社會に對する富豪としての責任に至っては曾て一日も怠りたるなし、その國家公共の事業に對しては義金を寄せ、若くは天災地變に際して慈善救恤の舉に出づる如き、常に他に先立して範を郷黨に示し、縣下の富豪皆市島家を以て標準となさざることなし、例へば明治十九年皇居御造營費中へ金千圓を献

納したるを始め、明治二十七八年役には軍費として金八千圓を献じ、その他越佐招魂義會へ金一千圓、早稻田大學の基金として金二千圓、天王小學校建築費として通じて金七千圓を寄せたる如き、或は五百圓、或は七百圓、その公共の事業に對して投じたるの金額を積算すれば、現代に於けるもののみにて實に數萬圓の多きと云ふ（因に記す、前號第七代主人の時代に於ける金穀納納の事歴を叙したる中、慶應元年金三千兩米千俵は幕府に献じたるにあらざりして官軍に献じたるものなり、又右の外慶應四年には新政府へ米二千俵を獻じ、明治四年には大津津分水費中へ金三千兩を獻じたり）然れども世の風潮に雷同して漫に寄金をするが如きは、氏の斷じて爲さるる所にして、その義金を投するの時には、必ず先づ寄金すべき事業の性質如何を究めずんばならず、かの海防費献金事件の如き、その一例として見るべし。

献金の代りに北海道開拓

軍艦製造費献金の行はれたるは近く十數年の前に在り、當時畏くも御手元金中より年々三十萬金御下賜の御沙汰あり、大小の官吏は俸給十分一を献納し、而して全國の富豪にして献金の擧に出でざる者殆ど少なく、果ては海防費献金の多寡に依りて身代の大小を測るの標準とせらるゝの有様とはなりぬ、それ海防費の献金は勿論結構千萬なる事に相違なし、否、至誠國に盡すの衷情固より深く感賞に値ひするものありと雖も、しかも献金者の實情を穿鑿すれば、奉公の至誠に出

んとするもの、位階を買ひ得て人に傲らんとするもの（彼の平沼某が從五位に叙せられたるもこの時に在り、會々その然らざる者は地方官等の強請的勸誘に、澁々ながら懐中より絞り出したるものに過ぎず、されば市島家の如き當時全國に於ける富豪者流の負擔の比例より云へば、數萬圓の献金は固より免かれざる所にして、地方官の輩亦これを以て同家に強ひたりしのみならず、公事に際して率先献金等の擧に出づるは、由來市島家が祖宗以來の遺風とする所、況んや當主徳次郎氏はよく富豪の責任を解し、生平資を公共事業に投するに最も勉めつゝあるの人なるをや、然るに彼はこのたびに限りて斷然として献金せざるに決心せり、勸誘も誘惑も悉く却けて應ぜざりき、曰く海防費献金の事たる、義理必ずしも明白ならざるにあらざり、然れどもこれが献金を促がさんが爲に、神聖なるべき位階の切り賣を始め、滔々たる献金者亦概ね位階を賣る者の手段の卑陋亦斷じて排すべし、而して會々至誠國に盡すの意を以て献金する者あるも、世に玉石同架蓋共禁かんとなす、我等豈これが渦中に投するに忍びんや、且つそれ今や奉公の途單り海防費の献金のみに限るべからず、特に帝國北門の鎖鑰未だ完ならず、拓殖の事なほ遺憾多し、これ我等が邦家の爲めに宜しく力を盡すべきの方面にあらざると、乃ち海防費として献金すべく豫定せられたる金額に數倍するの資金を投じ、一族の人々を促して大に北海道開拓に従事せしめたりと云ふ、それ海防費献金と北海道開拓、何れか國に利する所多きや、將た兩者の成績如何等は、今擧げて評する



市島氏の至孝

吾家の發祥地

吾家の發祥地

吾家の發祥地

吾家の發祥地

吾家の發祥地

吾家の發祥地

吾家の發祥地

吾家の發祥地

氏人と爲り濃厚にして謙讓、而して父母に事へて至孝なり、  
氏が孝心の如何に深かりしかを知るの一端ともなるべきは、  
その實母宮島氏復籍の一條に在り、市島家に現に一人の女隠  
居あり、實に静月翁の未亡人にして當主徳次郎氏の實母なり  
宮島氏始め静月翁に嫁し長子徳太郎（即ち當主徳次郎氏）を  
生みしも、後故ありて破鏡の嘆を見ることとなり、爾來突然  
として獨棲し、堅く節を守りて謹愼身を持す、この際氏は静  
月翁に乞ふて曰く、既に破鏡の不幸を見る、乃ち大人に於て  
借老の妻たらずとも、見に於て豈慈母ならざらんや、願  
はくは兄が時に存問するを許せと、依て絶へず宮島氏の寓を  
訪ふてその薄運を慰めつゝありき、先之静月翁は宮島氏離婚  
後後妻小川氏を容れ、小川氏は婚後二十年數子を遺して幽界  
の人となりぬ、於是徳次郎氏は再び静月翁に向ひ、宮島氏が  
節を守る二十年一日の如く、その貞淑尋常人の及ぶ所にあら  
ざるを説き、切に復籍を乞ふて止まざりしかば、翁も氏が孝  
心の深きに感じて遂にその乞を許し、こゝに覆水復盆に歸  
るの慶事を見るに至りぬ、氏は宿昔の希望こゝに始めて達す  
るを得たるの喜びに堪はず、愈々孝道に勵みて謹格家業を執  
りしかば、静月翁は十餘年前安んじて天壽を終へ、宮島氏は  
市島家の御隠居として悠々餘生を樂しみつゝあるなりといふ

氏の至孝

の要を認めず、たゞこの一事、徳次郎氏が自ら標置すること  
頗る高く、而して漫に世の風潮に雷同せざるの見識を備ふる  
を見るべきのみ。

此く氏は孝道に於て殆ど悉さざる所なきに庶幾く、一小瑣事  
に至るまでも、如何にせば亡父の遺志に副ふべきやとは、今  
日に於て尚ほ氏が苦心しつゝある所なるが如く、例へば静月  
翁は佛法の信仰淺からず、嘗て東本願寺に對する歸依最も深  
く、隨つて翁の存生、中市島家は實に  
を以て目せられ、同寺淨財募集の事あるや、北陸に在ては市  
島氏常にこれが筆頭たりし、されば現代徳次郎氏はその信仰  
に於て必ずしも佛教に在らずと雖も、しかも、亡父歸依の故  
をもて今もなほ同寺の爲に應分の力を致しつゝありといふ。

東本願寺の北陸鎮臺

人に任ずるの氣風

氏之多藝多能

氏の風采は必ずしも揚れりと云ふべからず、然れども舉止端  
正にして謹嚴、氣品の高きは地方紳士中稀に見る所にして、  
特に第一期長者議員として貴族院に在ること七ヶ年、その交  
際する所の上流社會が多かりし爲めか、一層氣品を高めた  
るもの、如く、或人は氏を評して「彼は侯爵以上にあらすと  
雖も確に子爵以下にあらざると謂へり、氏は此く品格の高さと  
共に態度鷹揚にして善く人を信じ又善く人に任ず、畢竟信す  
れば任ず」とは氏が生平の主義にして、而して一度任ずる上  
は決してこれに干渉し容喙するなきところ、自らその度量の  
小ならざるを見る。

市の名に  
山は高  
幸甚感  
は眞誠  
山は高  
幸甚感  
は眞誠  
山は高  
幸甚感  
は眞誠

氏は書を善くし書に巧みに、又は書畫の鑑識に長ず、二十年前より早く寫眞術を研究し、今や素人としては漸くその奥に入らんとし、近年亦刺繡を學びて頗る得る所あり、特に意匠はその最も得意とする所にして、今の本邸の本座敷とその他の大庭園とは、一に氏の意匠の下に、親しく指揮して作り上げたるものなりと云ふ、その庭園は多く天然を利用して而かも野ならず、その本座敷は最も工事に力を致して而も俗ならず、蓋し氏は一面に於て些か茶人の風骨あり、随つてその意匠も多く茶道より來れるが如し。

### 氏の家庭

氏の夫人名は順子、水原の素封家佐藤伊左衛門(先代)の女にして貞淑の名あり、男子二人、共に健在す。

### 將來の市島家

名門と云ひ舊家と稱するもの各地方必ずしも少なしとせされども、然れども市島家の如く、歴代悉く人物の輩出せるものは多からず、先づ遠祖治兵衛の遠慮より、初代の活達、二代の愛造、而して第三代治郎右衛門の明敏、第四代徳次郎の謹格、深沈にして奇才ある第五代、第六代、第七代、第八代、これに繼ぐに勤儉にして事理に通せる第七代と、濃厚にして孝悌なる現代とを以てす、此く歴代の主人皆各殊の特色を有して家系に光彩を放てるは、これを全國に求めて珍とする所なるべく、而して市島家が三百年來連綿として、隆運を極むる所以亦實にこゝに基ならず、吾人は既往に於て此く目度さ

歴史を有せる市島家が、今後永くその富を維持し、いよいよこれを発展せしめて、越後の市島家は、更に日本の市島家として、廣く世界に紹介せらるゝの期あらんことを望まざるべからず。(完結)

### 妻たる者の心得

米國 コリン 女史

△數多き世界の女子の中より兎にも角にも長き生涯を偕にせんが爲、特に御身を選びたる良人の深情を能く心に銘して忘るゝ勿れ、良人をして選擇の當を得たるを喜ばしむると、將た又選擇の誤れるを悔むしむるとは一に弊て御身の仕打如何に在ることを知れ。  
△良人をして家庭を此上楽し快樂の天地と思惟せしむる機心を盡せ、良人の心常に外を思ふが如きは妻たる者の耻辱也。  
△収入少額にして食前珍味なき時は、御身が微笑の光をして食堂に溢れしめよ。収入多額にして食前珍味ある時は御身が無愛想の刃を以て折角の盛饌を廢敗せしむる勿れ。  
△良人の單獨的業務に立入る勿れ、其許諾を経ずして良人宛の手紙を披見する勿かれ、外出の際何を爲し居たるかを究問する勿れ、其許諾を経ずして良人の財蔵に觸るゝ勿れ、零碎せる小事に就て彼を夏蟻く訴ふることを勿れ。  
△御身の衣裳と頭髮だけはいつまでも結婚當時の如く清



## 市島家の發祥地

市島家の發祥地であるやうなもので、この土地には、市島家の祖と云ふべきものが、いまだに多く残つてゐる。市島家の祖と云ふものは、一説に、市島家の祖と云ふものは、いまだに多く残つてゐる。市島家の祖と云ふものは、いまだに多く残つてゐる。市島家の祖と云ふものは、いまだに多く残つてゐる。

# 北越新報

No. 172

市島家の發祥地であるやうなもので、この土地には、市島家の祖と云ふべきものが、いまだに多く残つてゐる。市島家の祖と云ふものは、いまだに多く残つてゐる。市島家の祖と云ふものは、いまだに多く残つてゐる。

市島家の發祥地であるやうなもので、この土地には、市島家の祖と云ふべきものが、いまだに多く残つてゐる。市島家の祖と云ふものは、いまだに多く残つてゐる。市島家の祖と云ふものは、いまだに多く残つてゐる。

市島家の發祥地であるやうなもので、この土地には、市島家の祖と云ふべきものが、いまだに多く残つてゐる。市島家の祖と云ふものは、いまだに多く残つてゐる。市島家の祖と云ふものは、いまだに多く残つてゐる。

市島家の發祥地であるやうなもので、この土地には、市島家の祖と云ふべきものが、いまだに多く残つてゐる。市島家の祖と云ふものは、いまだに多く残つてゐる。市島家の祖と云ふものは、いまだに多く残つてゐる。







報恩宮二神社  
實物像畫稿

二宮尊德先生肖像

Taiyo

我明創造 提唱者 高橋太洋 著作  
 文部省社団法人教育官 千葉敬止 校閲

誠の心と良い習慣

良い事をした時は心から嬉しいものです。例へば、父母、長上のいふことに従つて褒められた時、他の難義を救つてあげた時など、種々ありますが、不親切な事をしたり、豫習を怠けたり、喧嘩などをしたときは、面白くないものです。これが本當の心であつて良心といひます。ですから良い事をした時は、誰が見てなぐとも、知らなくとも、心が安らかですが、悪い事をした時は、心が落つかないで何となく不安で嫌なものです。ですから良い事をしなければなりません。それにはこの自己完成録に善を書入れるやうに修養することです。そして善を多く書入れるやうになれば、心も安らかになりますし、良い習慣ともなり、立派な人となる基本ともなるのであります。

自己完成録啓用誌

一、日々の行事を左に例示してありますから、朝の行事を果した時は下表朝の行事の項に善を一つ、反した時は悪を一つ書入れること、夜夜の行事も以上のやうに床に就くとき書入れるのですが、毎食後の休憩時にも書入れて、其の程度左の行事と徳目とを復唱すると一層よいのです。また左記を参考にして適宜に定めてよいのです。

朝の行事……長上に従ひ、行事に努力するのが、忠孝の一つです。

例示 起床時。日の出を拜し。運動、手傳へ等して。豫習、又は朝の仕事なし。登校又は仕事の準備を調へる。

晝の行事……自分のことは自分でして、遊ぶのは用がすんでから。

例示 勉強、仕事を真剣に努力し。帰宅した時は、學校用品又は持参品を定めた場所に置く。服物の始末をする。

夜の行事……服装、容姿は心の鏡、質素にして、よく整へませう。

例示 勉強、仕事を時までし明日の準備を整へる。身の廻りを調べて、片付ける。身を清潔にして、時床に就く。

二、右の例事を行ふうちに、特に左の事柄(徳目)に當つて守つたときは善を一つ、反したときは悪を一つ、下表の各項にそれぞれ書入れること。例へば、他の道案内をしてあげた時は、左の親切の(二)に當りますから下表親切の項に善を一つ書入れるやうなものです。

- 親切 (一) 眼下の者を勞つた時。(二) 他に親切を盡したとき。
- 勘忍 (一) 争ひ、悪口、告げ口をしなかつた時。(二) ねます、恨ます、美やまなかつた時(他を責めるな、替るな)。
- 正直 (一) 嘘、詐りをしなかつた時(心は正しく、清らかに)。
- 節制 (一) 物を控へ目にしたとき。(二) 贅澤をしなかつたとき。
- 注意 (一) 父母又は長上の教をよく聽いて、容れた時。(二) 特に心して怪我、過をさせたとき。
- 義務 (一) 約束、責任を果した時。(二) 自己完成録に書入れた時。
- 倫約 (一) 物と時間とを大切に、活かして用いたとき。
- 整頓 (一) 勉強、仕事したあと、遊んだあと等を片付けたとき。
- 禮儀 (一) 父母、長上への禮、外出と帰宅のときの挨拶、客に對する作法、公民としての禮等を守つたとき。

東京市世田谷區三宿町五十五番地  
 帝國藝術院  
 印刷部 印刷

◇……御希望の向きには毎月の御使用分をお預け致します……◇

自己完成録 年 月 日 (乙)

日	朝の行事	晝の行事	夜の行事	親切	勘忍	正直	節制	注意	義務	倫約	整頓	禮儀	善數	惡數	差引善
一															
二															
三															
四															
五															
六															
七															
八															
九															
十															
十一															
十二															
十三															
十四															
十五															
十六															
十七															
十八															
十九															
二十															
廿一															
廿二															
廿三															
廿四															
廿五															
廿六															
廿七															
廿八															
廿九															
三十															
卅一															
月計															
善數															
惡數															
差引善															

昭和十一年六月廿五日發行 發行所 東京市世田谷區三宿町五十五番地 帝國藝術院  
 昭和十一年六月廿二日印刷 印刷所 東京市世田谷區三宿町五十五番地 帝國藝術院  
 印刷代金二百圓 郵費代金六十圓 定額一圓金參拾

古經鑑賞

市島 春城

書物と云ふもの、範圍はなか／＼廣く、部類を分つたら百にも及ぶであらうが、各部にそれ／＼特殊の趣味がある。しかし何んと云ふても極致の趣味は、古經にありと云はねばなるまい。其の年代の古さに於て、其の筆寫の精妙に於て、其の版刻の精巧に於て、其の裝潢の端麗に於て、取り除けは勿論あるにしても、如何なる圖書もそれに及ぶことは無い。これには宗教的信仰の意味が籠つてゐる、これには帝王の祈願に係るものがあり、名門右族の熱誠の存するものがあり、名僧古賢の筆に成つたものがあり、莊嚴の意味に於て此の部類は圖書の隨一で、圖書を趣味とするものが段々向上すると、勢ひ此の部類にまで溯らねばならぬ。

年代の最も古い圖書は經卷であつた。寫經は白鳳年代に溯ることが出来る。版經は寶龜の多羅尼は世界最古の版と謂はれてゐる。熱烈なる敬佛の關係から寫經生は天下第一の能

古經鑑賞

筆が選ばれ、或る時代には支那から能筆の寫生を聘してゐる。用紙は最良のものが特製せられ、麻紙紺紙などは一般圖書に見る能はざるもので、金銀泥を以て字を書くことも經に限られたものである。豪華の經となると、あらゆる意匠が施され、卷首に莊嚴優美の佛畫があるのみならず、經卷を通して華麗の地文様のあるものもある。平氏の隆盛期に嚴島神社に納めた經の如きは、其の装釘の美は絢爛目を奪ふもの、あることは、人の知る所で繁説を要すまい。亦往々蓮華を金泥に畫して一華の中に一字つゝ書寫した經もあり、繪の文様ある扇面に寫經したものもある。高貴の人を記念するため其の遺墨の裏に書寫した紀念經もある。或は高僧が血書した經卷も少くない。

帝者の經となると、聖武帝光明皇后の願經が尤も多く存在し、華麗の裝飾は無いが、端嚴冒し難い崇高の趣があつて如

古經鑑賞

何にも堂々たるもので、聖武帝の願經には字の大小により大聖武中聖武など、呼んで、普通の經よりも大字に書かれて居り、其の識語は天子皇后の勅語其まゝが、莊重に書かれ、國家の隆昌と國民の萬福を祈る聖旨が存してゐる、何人も之を讀んで敬虔の念を起さないものはない。實に此上のない貴いものであるが、日本には兵亂や天變地殃を免かれて此の高貴の經が澤山に保存されてゐるのは目出たいことである。

經は祖先の冥福を祈るため、子孫の繁榮を冀ふ爲め、或は罪惡を謝する爲め等、種々の目的で神佛に献ずるものであるから、何れも精根を盡し、其數の多きは大概若六百卷に及び、或は一切經の如き浩漭のものもあり、納經者たる著名人物が自から筆寫したものもあり、然らざるものを概ね卷末の識語に名を自署してゐる。總じて寫經程敬虔の意が籠つたものはない。寫經には方式があつて、齋戒沐浴一切の邪念を去り焚香して一字を書するにも苟くもしない。寫經の傍ら平曲を語ることも寫經場に於ける高雅の一光景である。寫字用の金泥に膠を用ゐないのも、獸脂を忌むことである。粉末の香を和して用紙を漉のは蓋害を避くる爲めでもあるが、又これにも敬虔の意が寓されてゐる。

佛教の隆盛時代には諸家の納經が頻々たるので、往々支那船載の寫經を利用し、我が名家の識語を添へたものが可なり多くある。中には白鳳よりも古るものがあり、随分優れたものもある。支那人の識語を其まゝにして日本の識語が添はつてゐるのは此部類に屬する。此時代に支那から流れこんで來た經はどれほどあるか。支那に早く亡びて、日本のみに

二

存してゐるものが少くないので、嘗て大典和尚は其目錄を製し、且つ其經を寫して支那に寄せんとしたこともある。支那に亡びて日本にのみ存する典籍は少くないが、佛典は恐らく尤も多きを占めてゐるであらう。

佛教隆盛時代には如何なる寺も經藏に一切經を藏める必要があつた。名利となるに殊に佳本を置かねばならなかつたので、徳川氏は方々の名利から宋元版の一切經を寄せ集めて三部まで増上寺に藏した。其中には平政子が伊豆の修禪寺に納めた宋版經もある。維新争亂の時増上寺は江戸が兵燹に罹らんとことを慮り、地方の末時に此經を分置して萬一に備へたこともある。亦此寺には曝書期に三部の一切經に風を入る、嚴かな式があつて、名僧監督の下に幾十の僧が齋戒沐浴して經卷を捧げてバラ／＼と各紙を繰り、數日に及ぶ式の次第を會つて増上寺の藏經を見に行つた時間いたことがある。

稀觀の經卷は今も貴まれてゐるが、昔は今よりも貴まれ、骨董書畫の好事家は頗る之れを珍とした。一卷の經が一行二行に斷たれ、それが手鑑に貼られた時代がある。僅かに二行三行の斷經を鄭重に裝潢して幅として珍重したこともある。斯く經卷を重んじた頃は珍藏を門外に出すことをせなかつた。已むを得ず人に貸す場合には尙かに目方を量つて貸した珍談すらある。二行三行斷たれても一寸算し兼ねるものも自分で、それほど大切がられた。随つて古經を模造するものも自から出來、随分眞を亂るやうなものも出來た。今は複製術が進んで、嚴嶋經などは立派に複製されてゐるが、まだそれほど進まない時分、西村兼文などは巧みに模造して人の目を瞞

ました。此人は京都の名利に出入して古い經卷の餘白を獲、それに寫眞術などを應用して巧みに模するから、どうしても眞實の辨別がつかなくつた。曾て此人が作つた良辨の紺紙金泥經が三千圓の價で井上侯爵に歸したと聞いたが、其頃自分は同じ模本を某書店で發見し、強て三圓に賣つて貰つて、井上侯の千分の一の價だと獨り興じたこともあつた。

昔から古經を蒐集した人はいくらかもある。樂翁翁は各種の零本經を集めて一切經全部を作らんとされたが、全部をなしたかどうかは知らぬが、増上寺の行誡上人もしきりに古寫經を漁つて、佳本が今もちらほら世に出ることがある。しかし何んと云ふても田中青山伯爵が尤も大なる蒐集家であらう。其實に於ても量に於ても實に大したものだ。自分は岩淵の別荘に伯を訪ふた時、其尤品數十卷を拜觀して、伯の選擇の高雅に服したが、後根津家に移つてから、其全部を見て其の量の餘りに多いのに一驚を喫した。到底二日や三日で匆卒の涉獵も出来兼ねる程澤山にある。伯は一時しきりに古經を漁られて、自から寓目の古經目錄を作られたことがある。それは題跋まで録したもので數百點に及び、伯爵藏の經も收めてあるが、古經研究家に參考となるものだ。

自分自身の古經蒐集などは言ふに足らないが、一時蒐集に没頭したこともある。天平時代石川年足が菩提寺へ納めた六百卷の寫經は、全部揃つてゐる年足の署名もあり自身が書いたものらしく、寫經生の筆ではなからう。此所にうぶの味があつた。此外元興寺經、中尊寺經、小水廢經其他十數卷を有してゐたが、自分の最も誇りとしたものは、白鳳の金剛場陀

羅尼經一卷であつた。青山伯の豊富の蒐集も此經は僅かに數尺の斷簡しかなかつたが、自分のは法隆寺舊藏で、一卷纏つてゐるのみでなく、卷末の題語が備つてゐて、河内國志貴評内とあり、郡の行政區に先たち、高麗の行政區評の字を用ゐてゐるので、白鳳時代の寫經であることが知れた。白鳳時代の鐘銘には郡の代りに評の字が用ゐてあり、大和の長谷寺の佛座には白鳳代の刻字があるが、多分同じ人が書いたのであらうと考證され、書體は天平時代の柔軟のものなく、極めて剛健で往々八文體を交へて居り、寫經として日本には最古のものであるが、亡友小川簡堂がしきりに古經を漁り、天平經などを珍重してゐるので、眼識か低いなどと云ふたことが禍をなして、終に割愛するの已むなきに至つたことを今も尙かに悔いてゐる。

題補公像

補公本帝實。	何必設傳説。	吟嘯唱大義。	皇運開日月。
惜無高宗賢。	歲早未醫渴。	和羹失鹽梅。	舟楫亦摧裂。
雖知大事去。	所許終不折。	臨死留其子。	遺戒衛帝廟。
三朝扞死家。	正統繫一髮。	終始爲朝家。	濃盡國門血。
生爲萬夫雄。	死爲千古烈。	至今金剛山。	行人仰瞻礙。

中村數字先生曰。古今題公像者多矣。此詩爲歷卷。

佐久間象山

古經鑑賞

紅葉山人(三たび)

市島春城

紅葉山人

紅葉山人の思ひ出は一兩度書いて幾んど知るだけの事を書き盡し、終りに書簡抄まで調べて所感を録した。然るに此頃閑に乗じて山人と交はつた頃の雜記類を檢すると、ボツ／＼種々の事が出てくる、所謂の山人の唾餘ともいふべき零碎のもの凡てが棄てるも惜しいから、抄録して、山人思ひ出の附録に充てる。

山人は小説の文體に種々苦心をして常に云ふには、僕は四十歳迄を準備時代と定めて置いて、小説の文體もツレ迄は一定しない。四十歳迄試験的に書いて四十以上から一定した文體を發見する積りだといふてゐたが、悲しいかな四十歳に至らない内に歿した。しかし山人の抱負はこれで窺ふことが出来る。

山人は胃痛の宣告を受けた後もセンチリ辭典の購求の豫約をしたり、種々なる反譯にも筆を着け始めた。直ぐにも死ぬ程の病人が、怖れず騒がず平然として自分の生命は、いくらでも續くかのやうに、いろ／＼の事業を計畫したのとは、吾等をして案外の思あらしめた。俳句に就ても病中に萬葉の趣味を詠み込みたいと考へ、私の所に「萬葉古義」があると聞いて、頻にこれを譲れといふ。今死ぬ病人が……とも思つたが、本人は是非にといふて矢の如き催促だから、スッカリ揃へて持たしてやつたが、其後山人からの手紙が面白い。其意味は「萬葉古義を頻りに味ひ始めたが、箇の所へ行くのが待ち遠い」といふのであつた。菓子好きの山人が、箇に思ひ至つたのも面白いが、其の旨味を嗜みわくるまでに、壽命が



ました。此人は京都の名利に出入して古い經卷の餘白を獲、それに寫眞術などを應用して巧みに模するから、どうしても眞實の辨別がつかぬかつた。曾て此人が作った良辨の紺紙金泥經が三千圓の價で井上侯爵に歸したと聞いたが、其項自分は同じ模本を某書店で發見し、強て三圓に賣つて貰つて、井上侯の千分の一の價だと獨り興じたこともあつた。

昔から古經を蒐集した人はいくらかもある。樂翁公は各種の零本經を集めて一切經全部を作らんとされたが、全部をなしたかどうかは知らぬが、増上寺の行誡上人もしきりに古寫經を漁つて、佳本が今もちらほら世に出ることがある。しかし何んと云ふても田中青山伯爵が尤も大なる蒐集家であらう。其質に於ても量に於ても實に大したものだ。自分は岩淵の別荘に伯を訪ふた時、其尤品數十卷を拜観して、伯の選擇の高雅に服したが、後根津家に移つてから、其全部を見て其の量の餘りに多いのに一驚を喫した。到底二日や三日で匆卒の涉獵も出来兼ねる程澤山にある。伯は一時しきりに古經を漁られて、自から寓目の古經目錄を作られたことがある。それは題跋まで録したもので數百點に及び、伯爵藏の經も收めてあるが、古經研究家に參考となるものだ。

自分自身の古經蒐集などは言ふに足らないが、一時蒐集に没頭したこともある。天平時代石川年足が菩提寺へ納めた六百卷の寫經は、全部揃つてゐて年足の署名もあり自身が書いたものらしく、寫經生の筆ではなからう。此所にうぶの味があつた。此外元興寺經、中尊寺經、小水藏經其他十數卷を有してゐたが、自分の最も誇りとしたものは、白鳳の金剛場陀

羅尼經一卷であつた。青山伯の豊富の蒐集も此經は僅かに數尺の斷簡しかなかつたが、自分のは法隆寺舊藏で、一卷纏つてゐるのみでなく、卷末の題語が備つてゐて、河内國志貴評内とあり、郡の行政區に先たち、高麗の行政區評の字を用ゐてゐるので、白鳳時代の寫經であることが知れた。白鳳時代の鐘銘には郡の代りに評の字が用ゐてあり、大和の長谷寺の佛座には白鳳代の刻字があるが、多分同じ人が書いたのであらうと考證され、書體は天平時代の柔軟のものなく、極めて剛健で往々八文體を交へて居り、寫經として日本には最古のものであるが、亡友小川簡堂がしきりに古經を漁り、天平經などを珍重してゐるので、眼識が低いなどと云ふたことが禍をなして、終に割愛するの已むなきに至つたことを今も苟かに悔いてゐる。

題補公像

補公本帝賢	何必説傳説	鈔驅唱大義	皇運開日月
惜無高宗賢	歲早未醫渴	和突失鹽梅	舟楫亦推裂
誰知大事去	所許終不折	臨死留其子	遺戒衛帝嗣
三朝扞蛇家	正統藥一髮	終始爲朝家	濃盡閭門血
生爲萬夫雄	死爲千古烈	至今金剛山	行人仰轉輿

中村數字先生曰。古今題公像者多矣。此詩爲歷卷。

古經鑑賞

紅山藥

の記事がある。當時の雜誌「新小説」に門人が山人の口吻に擬して左の如く言ふてゐる。  
随分僕も小説を書いて、それに種々の題を付けた故、何、君は「紅白毒饑頭」といふ表題が可？、またそんな考へぢやいけな、あゝいけいとも、僕は自分で、實に巧い題を付けたと今以つて思つて居るのは「隣の女」といふのさ、第二平易で誰にも解つて居る、おや、こりや隣の女の事を書いてあるのだと思ふと同時に、その女の住んで居る隣りにどんな者が住んで居る？、といふ問題が起る。従つて興味も起ると言つて「隣の女」と明白に言つたところ、表題で全篇の底を割る分ぢやなし、僕は最も適切な題を付けたと思つて居る。  
それから「鑿」「銀」なんといふ二字を題にした事がある。「鑿」としたあの中の主人公が開業醫試験で受ける及第狀の、鑿インキで刷つてゐるのを題にしたのだが、その時は「鑿」を以つて見やうと思つたので、また「むらさき」と四音ぢやいけな、もつと語呂の悪い奴を連んでやうと思つて居る、偶然「銀」といふものなんぞが出来たのさ、例の「金色夜叉」か、あれはまあ表題の現して居るやうに、高利貸を金色の夜叉に譬へたのだが、一時の思ひ付きぢやあるけれども、世間へも金色夜叉といふ事を流行させて、金色夜叉といへば直ちに高利貸の異名と分るやうにしたといふ考だつたのさ、「不言不語」多情多恨「あれなどは二字同じ字を使つて見やうといふ考だつたのだ。  
凝り性の山人が如何に小説の題に苦心したかを見よ。  
曾て山人と柳島に遊んで橋本に會食したことがある。山人は近頃の藝者の腐敗の甚しきを憤慨し、昔しの江戸藝者の意氣を稱し、其一例として語られた事實に、山人の小説にでもありさうなことで、頗る興味を以つて山人の談に聞き入つた。  
山人の老母の若かつた頃互ひに往來した藝者に、芝に堀兼と云ふがあつた。(此話のあつたのは明治三十三年頃で、其頃はまだ堀兼存命だと云ふ此段文字である故に、「堀兼」と人は姓名した。其頃某藩の留守居軍役で、深く此技を愛するものがあつた。三年の間幾んど間斷なく呼びつめにしたが、終に許さなかつた。然るに此男もさる者で、或る年の首に、雙澤を極めた、三ツ重ねの新服を纏つて寸志なりと與へたが、流石の鑿兼も過ぎに事ども考合はせて、坐ろに感慨に堪へず、急に許す氣になつて、それよりは餘計な間柄となつたが、其後留守居の某は放蕩の浪費に主家の金を私用した事に坐し柳島に禁錮の身となつた。「鑿兼」は女の力を以て、けなけなにも一夜ひそかに、柳島に泳ぎ渡り、遂に情夫を盜み出し、何れへか身を隠せしめた、これは「鑿兼」の最も得意のはなして、山人の老母に感々聞かされたと云ふたが、こ

山人の老母の若かつた頃互ひに往來した藝者に、芝に堀兼と云ふがあつた。(此話のあつたのは明治三十三年頃で、其頃はまだ堀兼存命だと云ふ此段文字である故に、「堀兼」と人は姓名した。其頃某藩の留守居軍役で、深く此技を愛するものがあつた。三年の間幾んど間斷なく呼びつめにしたが、終に許さなかつた。然るに此男もさる者で、或る年の首に、雙澤を極めた、三ツ重ねの新服を纏つて寸志なりと與へたが、流石の鑿兼も過ぎに事ども考合はせて、坐ろに感慨に堪へず、急に許す氣になつて、それよりは餘計な間柄となつたが、其後留守居の某は放蕩の浪費に主家の金を私用した事に坐し柳島に禁錮の身となつた。「鑿兼」は女の力を以て、けなけなにも一夜ひそかに、柳島に泳ぎ渡り、遂に情夫を盜み出し、何れへか身を隠せしめた、これは「鑿兼」の最も得意のはなして、山人の老母に感々聞かされたと云ふたが、こ





ました。此人は京都の名利に出入して古い経巻の餘白を獲、それに寫眞術などを應用して巧みに模するから、どうしても眞價の辨別がつかなくつた。曾て此人が作つた良辨の紺紙金泥經が三千圓の價で井上侯爵に歸したと聞いたが、其頃自分は同じ模本を某書店で發見し、強て三圓に賣つて貰つて、井上侯の千分の一の價だと獨り興じたこともあつた。

昔から古經を蒐集した人はいくらかもある。樂翁翁は各種の零本經を集めて一切經全部を作らんとされたが、全部をなしたかどうかは知らぬが、増上寺の行誡上人もしきりに古寫經を漁つて、佳本が今もちらほら世に出ることがある。しかし何んと云ふても田中青山伯爵が尤も大なる蒐集家であらう。其質に於ても量に於ても實に大したものだ。自分は岩淵の別荘に伯を訪ふた時、其尤品數十巻を拜観して、伯の選擇の高雅に服したが、後根津家に移つてから、其全部を見て其の量の餘りに多いのに一驚を喫した。到底二日や三日で匆卒の涉獵も出来兼ねる程澤山にある。伯は一時しきりに古經を漁られて、自から寓目の古經目録を作られたことがある。それは題跋まで録したもので數百點に及び、伯爵藏の經も收めてあるが、古經研究家に參考となるものだ。

自分自身の古經蒐集などは言ふに足らないが、一時蒐集に没頭したこともある。天平時代石川年足が菩提寺へ納めた六百卷の寫經は、全部揃つてゐる年足の署名もあり自身が書いたものらしく、寫經生の筆ではなからう。此所にうぶの味があつた。此外元興寺經、中尊寺經、小水厩經其他十數巻を有してゐたが、自分の最も誇りとしたものは、白鳳の金剛場陀

羅尼經一卷であつた。青山伯の豊富の蒐集も此經は僅かに數尺の斷簡しかなく、自分の法隆寺舊藏で、一卷纏つてゐるのみでなく、卷末の題語が備つてゐて、河内國志貴評内とあり、郡の行政区に先たち、高麗の行政区評の字を用ゐてゐるので、白鳳時代の寫經であることが知れた。白鳳時代の鐘銘には白鳳代の刻字があるが、多分同じ人が書いたのであらうと考證され、書體は天平時代の柔軟のものなく、極めて剛健で往々八文體を交へて居り、寫經として日本には最古のものであるが、亡友小川簡堂がしきりに古經を漁り、天平經などを珍重してゐるので、眼識が低いなどと云ふたことが禍をなして、終に割愛するの已むなきに至つたことを今も窃かに悔いてゐる。

題補公像

佐久間象山

補公本帝贊。何必設傳説。諺稱明大義。皇運開日月。惜無高宗賢。歳早未醫渴。和羹失鹽梅。舟楫亦摧裂。雖知大事去。所許終不折。臨死留其子。遺戒衛帝闕。三朝扞蛇豕。正統禦一髮。終始爲朝家。滌盡國門血。生爲萬夫雄。死爲千古烈。至今金剛山。行人仰嚀嶽。中村敬宇先生曰。古今題公像者多矣。此詩爲歷卷。

古經鑑賞

山内先生は、この書に、  
「山内先生は、この書に、  
「山内先生は、この書に、

山内先生

山内先生は、この書に、  
「山内先生は、この書に、  
「山内先生は、この書に、

山内先生

山内先生

山内先生は、この書に、  
「山内先生は、この書に、  
「山内先生は、この書に、

山内先生

山内先生は、この書に、  
「山内先生は、この書に、  
「山内先生は、この書に、

山内先生

山内先生は、この書に、  
「山内先生は、この書に、  
「山内先生は、この書に、

紅葉山

紅葉山

して、其中に紅葉、露伴、其他の有名人の文藝の事を紹介してあつた事の話をした。それを聞いて、彌治氏は紅葉先生を紹介せよと言つた。手紙を以て面會の承諾を得、其翌日の午後二時頃彌治氏と車を馳せて先生の居宅に赴いた。懸て予等は遂に二階迄の然のみ大々から、日本家に着いた。そこに入つて靴を脱ぎ、靴を脱いで家に入るのが日本の風である。而して僕に予等の名刺を渡した。

敷物を過ぎて紅葉先生は出て來つて、我等を自分の坐（即ち書齋）に導いたのであつた。こゝで、日本人の常なる頭首の禮が始つた。頭首が始る時には我々歐羅巴人は何となく、ばつ、の悪い感が生ずる。儀式は旋て終り、予等は床の上に投附らして、あつた枕の上に（座蒲團の意なり）座るやうに勧められた。氏の書齋は疊敷の日本風のかなり広い室で窓に密つた一方の壁際に低い机が置いてある。此机に向つて書くには、足を屈めて坐らなければならぬ。机の上には書物、墨、筆、紙、原稿が、不順序に散らしてあつて、而も原稿の一部分は床の上にも、投げ捨ててある。壁には額仕立の數面の寫眞が掛けてあつて、彼方には書棚がある。其上に散らしてある書物の中には洋書の類も多く見受けられた。机の側には日本座敷の附物の燗草道具と火桶を置いて、火桶の上には茶釜がかゝつていて、其側には茶器……是だけのp。

是等が書齋の上になつて、而して此處に予等も亦座して居るのを想像して見たら、随分奇麗なものである。氏は三十六歳、一見するに、其の容貌は日本人には似て居らぬ、唯服装が然る思はしむるに過ぎぬ。骨相上から考へれば、寧ろ北國の人と云ふべきもので、頗るスカンチ。ナツヤ人の風がある。予は此事を告げた時、氏は久しく笑つてゐた。私は露西亞人と語る機を得て甚だ喜びます——氏は言ひ始めた。是は私には初度です。私は露西亞の文學を甚だ面白く感じてゐます。然し惜い事は露語を知りませんが、露西亞の作家の或物は讀みました。例へばツルゲエネフを讀みました。其散文詩は最も感動を與へました。あれを悉く日本語に譯したいと思ひます。今我國では露西亞の文學を非常に珍重して居ります。而して私の思ふとは、露西亞文學を知るに由つて、始て露西亞人と親交するを得るやうになるでせう。で、此の親交は日露の平和を固むる基と爲すに疑無い。先頃我々は貴國のトルストイ伯爵が教會から破門された事を新聞で讀みました。又彼の夫人の手紙と、府主教の答書も讀みました。ですから、



ました。此人は京都の名刹に出入して古い經卷の餘白を獲、それに寫眞術などを應用して巧みに模するから、どうしても眞實の辨別がつかなくつた。曾て此人が作った良辨の紺紙金泥經が三千圓の價で井上侯爵に歸したと聞いたが、其頃自分は同じ模本を某書店で發見し、強て三圓に賣つて貰つて、井上侯の千分の一の價だと獨り興じたこともあつた。

昔しから古經を蒐集した人はいくらかもある。樂翁公は各種の零本經を集めて一切經全部を作らんとされたが、全部をなしたかどうかは知らぬが、増上寺の行誡上人もしきりに古寫經を漁つて、佳本が今もちらほら世に出ることがある。しかし何んと云ふても田中青山伯爵が尤も大なる蒐集家であらう。其質に於ても量に於ても實に大したものだ。自分は岩淵の別荘に伯を訪ふた時、其尤品數十卷を拜觀して、伯の選擇の高雅に服したが、後根津家に移つてから、其全部を見て其の量の餘りに多いのに一驚を喫した。到底二日や三日で匆卒の涉獵も出来兼ねる程澤山にある。伯は一時しきりに古經を漁られて、自から寓目の古經目録を作られたことがある。それは題跋まで録したもので數百點に及び、伯爵藏の經も收めてあるが、古經研究家に參考となるものだ。

自分自身の古經蒐集などは言ふに足らないが、一時蒐集に没頭したこともある。天平時代石川年足が菩提寺へ納めた六百卷の寫經は、全部揃つてゐる年足の署名もあり自身が書いたものらしく、寫經生の筆ではなからう。此所にうぶの味があつた。此外元興寺經、中尊寺經、小水庵經其他十數卷を有してゐたが、自分の最も誇りとしたものは、白鳳の金剛場陀

羅尼經一卷であつた。青山伯の豊富の蒐集も此經は僅かに數尺の斷簡しかなくつたが、自分の法隆寺舊藏で、一卷經つてゐるのみでなく、卷末の題語が備つてゐて、河内國志貴評内とあり、郡の行政區に先たち、高麗の行政區評の字を用ゐてゐるので、白鳳時代の寫經であることが知れた。白鳳時代の鐘銘には白鳳代の刻字があるが、多分同じ人が書いたのであらうと考證され、書體は天平時代の柔軟のものなく、極めて剛健で往々八文體を交へて居り、寫經として日本には最古のものであるが、亡友小川簡堂がしきりに古經を漁り、天平經などを珍重してゐるので、眼識が低いなどと云ふたことが禍をなして、終に割愛するの已むなきに至つたことを今も尙かに悔いてゐる。

題補公像

- |        |        |        |        |
|--------|--------|--------|--------|
| 補公本帝贊。 | 何必設傳説。 | 眇擊唱天義。 | 皇運開日月。 |
| 惜無高宗賢。 | 歲早未醫渴。 | 和藥失靈梅。 | 舟楫亦摧裂。 |
| 誰知大事去。 | 所許終不折。 | 臨死留其子。 | 遺戒衛帝闕。 |
| 三朝拜堯家。 | 正統藥一髮。 | 終始爲朝家。 | 濃盡園門血。 |
| 生爲萬夫雄。 | 死爲千古烈。 | 至今金剛山。 | 行人仰嚶嶽。 |
- 中村數字先生曰。古今題公像者多矣。此詩爲歷卷。

佐久間象山

古經鑑賞

紅葉山

紅葉山人

文學者の努力が我國では十分の報酬を得てゐるかのお訊ですか。私は之に就いて言ふ事が出来ず。我國の青年作家はとも、文學上の報酬のみで生活して行く事は難い。私は今日の處、一印刷紙(十六頁)に就いて八十圓得取ります。紅葉先生が日本文學者の巨魁であること云ふ事から推して考へて見れば、先生の受ける報酬はあまり十分ではないと認めなければならぬ。別に臨んで先生は其の寫眞と、書眉と、著書數部とを記念として予に賜うた。日本の文學と知己になつたのは、予に強き感動を引起さしめた。文學が其の低い、玩具的な、机に對して、床の上に坐つて書いてゐる壁の横子は、予をして彼の、太古の、好、時、代、を、思、ひ、起、さ、し、め、た、の、で、あ、る、...。對話中往々錯誤あるは、案ずるに、記者が補綴の失ならん乎。今一々條下に釋解せんも煩しければ、姑く原文に従ふのみ。

自分の雜録中に、山人と讀賣新聞との葛藤と云ふ一項を發見した。讀賣の當時の社長や株主など云ふ面々も、追々時代後れとなつて、記者に對する待遇も段々粗略に流れて、記者が動搖を初めた頃の事である。ある歲晩に山人は三百圓の借入を申込んだ所、社がこれを拒んで應じなかつたので、山人は前途頼み少ないと云ふので、辭表を出す騒ぎとなつた。自分はその際主筆であつたから段々調べて見ると、無理は社にあることが分つた。全體山人の其頃の月給は百圓と云ふ額であつた。それも山人が病んで書かない時は遠慮して其月額すら遠慮して請取らずにゐた。然るに年末ではあるし、殊に「金色夜叉」の續篇を出す場合でもあつたので、社が貸してやるのは當然である云ふのは、山人は十年繼續在勤して山人の筆が讀賣の聲價を高めるにどれほど力があつたかに思ひ到らば、これ程の要求を拒むでもあるまいに、此の一文豪を失ふことが社の大事であることに気がつかず山人に不満を抱かしたことは大失策で、自分と高田半峯君は之れを彌縫するに可なり骨が折れた。山人は江戸兒肌で、平生報酬の事など彼は云はぬ質で、諸文人が段々去つて他に就ても、山人だけは、幾んど最後迄踏み止まつた。然るに病を得てから二六新報に移つたなどは、全く讀賣が山人に對する情誼を重んじなかつた結果に外ならないのである。

ました。此人は京都の名刹に出入して古い經卷の餘白を獲、それに寫眞術などを應用して巧みに模するから、どうしても眞贋の辨別がつかなくつた。曾て此人が作った良辨の紺紙金泥經が三千圓の價で井上侯爵に歸したと聞いたが、其頃自分は同じ模本を某書店で發見し、強て三圓にまけて貰つて、井上侯の千分の一の價だと獨り興じたこともあつた。

昔から古經を蒐集した人はいくらかもある。樂翁公は各種の零本經を集めて一切經全部を作らんとされたが、全部をなしたかどうかは知らぬが、増上寺の行誡上人もしきりに古寫經を漁つて、佳本が今もちらほら世に出ることがある。しかし何んとも云ふても田中青山伯爵が尤も大なる蒐集家であらう。其實に於ても量に於ても質に大したものだ。自分は岩淵の別荘に伯を訪ふた時、其尤品數十卷を拜觀して、伯の選擇の高雅に服したが、後根津家に移つてから、其全部を見て其の量の餘りに多いのに一驚を喫した。到底二日や三日で匆卒の涉獵も出来兼ねる程澤山にある。伯は一時しきりに古經を漁られて、自から寓目の古經目錄を作られたことがある。それは題跋まで録したもので數百點に及び、伯爵藏の經も收めであるが、古經研究家に參考となるものだ。

自分自身の古經蒐集などは言ふに足らないが、一時蒐集に没頭したこともある。天平時代石川年足が菩提寺へ納めた六百卷の寫經は、全部揃つてゐて年足の署名もあり自身が書いたものらしく、寫經生の筆ではなからう。此所にうぶの味があつた。此外元興寺經、中尊寺經、小水廬經其他十數卷を有してゐたが、自分の最も誇りとしたものは、白鳳の金剛場陀

羅尼經  
尺の斷  
てゐる  
内とあ  
てゐる  
の鐘銘  
佛座に  
らうと  
剛健で  
もので  
などを  
をなし  
に悔い

補公  
性無  
雖知  
三朝  
生爲

この經卷は、その中に「中尊寺經」として記述があるが、これは、中尊寺に所藏されていた經卷の写本である。この經卷の筆跡は、天平時代の石川年足の筆と推定され、その中に「中尊寺經」として記述がある。この經卷は、天平時代の石川年足の筆と推定され、その中に「中尊寺經」として記述がある。

古江香松

——  
一 一

一 今日一日の慎みにて候  
 一 今日一日の存命をよろこび家業を大切に  
 つとむべき事  
 一 今日一日の油断をなす事忠孝を  
 怠らざる事  
 一 今日一日の嘘言をいはす無理なることをす  
 ましき事  
 一 今日一日の決して腹を立つましき事  
 一 今日一日の三ツ師の御恩をわすれず不足  
 ぶましき事

今日一日之事

- 一 今日一日三ツ師の御恩をわすれず不足い  
ふましき事
- 一 今日一日決して腹を立つましき事
- 一 今日一日嘘言をいはす無理なることをすま  
しき事
- 一 今日一日人のあしきをいはす我かよきをい  
ふましき事
- 一 今日一日の存命をよろこび家業を大切に  
つとむべき事

右者唯今日一日の慎みにて候

翌日ありと油断をなす事忠孝を

今日一日はけみつとめよ

明治辛亥新正

七十四翁 實行道人識



今日一日之事

一 今日一日之<sup>研</sup>君父終焉悲哉

わきれ事不足いよまきい

一 今日一日之<sup>一</sup>腹をま

まの<sup>一</sup>事

一 今日一日之<sup>一</sup>言試い

多<sup>一</sup>ことさ<sup>一</sup>ま<sup>一</sup>海<sup>一</sup>ま<sup>一</sup>子

一 今日一日人の<sup>一</sup>試い

我<sup>一</sup>よ<sup>一</sup>事

一 今日一日<sup>一</sup>存<sup>一</sup>家<sup>一</sup>よ<sup>一</sup>海<sup>一</sup>い

家業<sup>一</sup>試<sup>一</sup>太<sup>一</sup>お<sup>一</sup>小<sup>一</sup>法<sup>一</sup>上<sup>一</sup>も<sup>一</sup>き<sup>一</sup>り

右者唯今日一日<sup>一</sup>農<sup>一</sup>情<sup>一</sup>ま<sup>一</sup>て<sup>一</sup>快

お<sup>一</sup>音<sup>一</sup>あ<sup>一</sup>ま<sup>一</sup>と<sup>一</sup>法<sup>一</sup>街<sup>一</sup>を<sup>一</sup>能<sup>一</sup>く<sup>一</sup>以

右者<sup>一</sup>も

今日一日<sup>一</sup>也

ま<sup>一</sup>け<sup>一</sup>み<sup>一</sup>法<sup>一</sup>と<sup>一</sup>免<sup>一</sup>よ

右者唯今日一日

一 今日一日ニッ君父終焉悲哉

わきれ勢不足りしよし

一 今日一日変し一服をま

すの事

一 今日一日も言試いし

多敷こと

一 今日一日人のあ

我のよ

一 今日一日も存念をよ

家業誠にお

右者唯今日一日

お音あ

右者

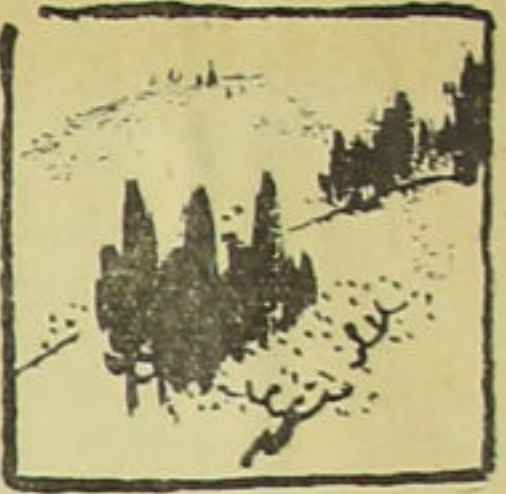
今日

まけみ

右

十四





そ、い、ろ、言

(二十七)

遠山夕雲

さいのかみを憶ふ

◇……年のうちに春は来にけり、ひととせを去年とやいはむことしとやいはむ……

部分が二月の四日で立春は五日だ。然るに今年の陰暦元日は二月の八日だから、正さに此の歌の通りだ。理窟一編として捨去るには餘りに調子が美しい。それにその理窟にも情味を伴なつてゐるから環境が強く生活を支配した昔とすれば之も名歌だつたであらう。一體、今の新年を新春といふのは昔の新年即ち新春たりし行事を移した點から言へば安當ではあるが、こゝ半月程の猛風雪から言へば、大寒最中で、新春どころでは無い。それが北國の越後だから尚更である。今は人事で言へば新春であるが、自然で言へば春は違ひ。

◇……さいの神、それは往昔正月十五日に宮中で行はれた悪魔祓の儀式——三徳打が左義長となり、どんどと呼ばれて地方化したものであらうか。さへの神は黄泉の國から攻め寄せる惡鬼共を塞ぎ追ひ返す神様で、つまりは道路の守護神、やちまた産の神とやちまた販の神であらう。すると、さしづめ鐵道員や、船員、交通業者や旅行者、特に生命の安全を感謝祈念すべき神様だが、生命より金の世の中だから、兎角専門達の稲荷様なんぞばかり拜みたる。だから汽車の衝突だの雪なやみだの、魂を消した淺間丸の船長さんのやうなことが起き易いのであるまいか。

◇……昔の寒の神様が土に因縁のある寒の字の神様だつたのを後世、いつの間にか金を象徴する貝を用ひた寒の字の神様に置きかへてしまつたなぞは、どうも生命より金のあらはれで無からうか。いや道ばたの寒の神(道祖神)へお賽銭を上げるために、寒の神となつたのかも知れん。それから、さへが、さいになつたあたりは、えといの區別のない越後

うれ 力は燃 無の嶺 〇は書 じと喜 くと雪 〇燃え 竹に であ へに奉 〇見る 〇人々 〇宗教 〇及ぶ 〇人も 〇人な 出来



上で先づは百人位の人が出て、村の中央の田面に集合する。それから七五三廻、門松を集めて来る子供、藁や餅を運ぶ者、孟宗竹を伐り出す者、信濃川岸の保安林から雪折杉を運ぶもの、雪の地盤を固めた上に、集まつた材料で賽の神の機代を作るもの、我々當々たる一村の共同作業で、高さ三、四間、根元の直径三、四間の筒型をした賽の神が出来あがる。

◇……家に歸つて風呂に温まり、衣服を改め、祝ひのお膳を済ましてから、冷酒や餅をたづさへ、老若男女が賽の神のぐりるに集まつて来る。竿を揃いで来る青壯年、おんべを籠に入れて来る老主人……。花嫁は花嫁、娘は娘でお正月中に最も着飾つて来るのが此の時だ。やがておんべの竿を林立して觀賞しながら、各自携帯の徳利と盃で冷酒が酌み交はされて、そろ／＼、よい元氣になると、郷土の合唱歌たる天神唄がはじまるのだ。めでたや、これの臺所」と一人の長老が音頭をとると二、三百の全員が「お茶八つになる、うしろに倉が九つ」と聲張りあげて合唱した末にシャン／＼と三回揃つて拍手をして「繪めて」と全員が一緒に言うて、更にシャン／＼と拍手をして、一度に大聲で「おめでたう」と呼ぶ。天神ばやしを三、四回も繰返してから、愈々賽の神に火をつける。

◇……北國の冬特有の灰色の雲の切れ目から黄色の夕空が赤い夕陽と共に廻りゆく頃合ひ、炎々と燃えさかる賽の神では青竹がどんどんと爆破して火の子が飛ぶ。酒と煙に上氣した村人は舞うて家族協同で竿をかたむけ、おんべの裾を火煙の中に振り込み、さながら龍が昇天するやうに、うまく煙の中に躍りあがると、時分はよしと竿の先端を火煙に入れておんべを焼き切る。竿から放たれた大きなおんべがさながら火

が出来る。それから、冷酒や餅をたづさへ、老若男女が賽の神のぐりるに集まつて来る。竿を揃いで来る青壯年、おんべを籠に入れて来る老主人……。花嫁は花嫁、娘は娘でお正月中に最も着飾つて来るのが此の時だ。やがておんべの竿を林立して觀賞しながら、各自携帯の徳利と盃で冷酒が酌み交はされて、そろ／＼、よい元氣になると、郷土の合唱歌たる天神唄がはじまるのだ。めでたや、これの臺所」と一人の長老が音頭をとると二、三百の全員が「お茶八つになる、うしろに倉が九つ」と聲張りあげて合唱した末にシャン／＼と三回揃つて拍手をして「繪めて」と全員が一緒に言うて、更にシャン／＼と拍手をして、一度に大聲で「おめでたう」と呼ぶ。天神ばやしを三、四回も繰返してから、愈々賽の神に火をつける。

◇……北國の冬特有の灰色の雲の切れ目から黄色の夕空が赤い夕陽と共に廻りゆく頃合ひ、炎々と燃えさかる賽の神では青竹がどんどんと爆破して火の子が飛ぶ。酒と煙に上氣した村人は舞うて家族協同で竿をかたむけ、おんべの裾を火煙の中に振り込み、さながら龍が昇天するやうに、うまく煙の中に躍りあがると、時分はよしと竿の先端を火煙に入れておんべを焼き切る。竿から放たれた大きなおんべがさながら火

の賽の神の機代を作るもの、我々當々たる一村の共同作業で、高さ三、四間、根元の直径三、四間の筒型をした賽の神が出来あがる。

◇……家に歸つて風呂に温まり、衣服を改め、祝ひのお膳を済ましてから、冷酒や餅をたづさへ、老若男女が賽の神のぐりるに集まつて来る。竿を揃いで来る青壯年、おんべを籠に入れて来る老主人……。花嫁は花嫁、娘は娘でお正月中に最も着飾つて来るのが此の時だ。やがておんべの竿を林立して觀賞しながら、各自携帯の徳利と盃で冷酒が酌み交はされて、そろ／＼、よい元氣になると、郷土の合唱歌たる天神唄がはじまるのだ。めでたや、これの臺所」と一人の長老が音頭をとると二、三百の全員が「お茶八つになる、うしろに倉が九つ」と聲張りあげて合唱した末にシャン／＼と三回揃つて拍手をして「繪めて」と全員が一緒に言うて、更にシャン／＼と拍手をして、一度に大聲で「おめでたう」と呼ぶ。天神ばやしを三、四回も繰返してから、愈々賽の神に火をつける。

◇……北國の冬特有の灰色の雲の切れ目から黄色の夕空が赤い夕陽と共に廻りゆく頃合ひ、炎々と燃えさかる賽の神では青竹がどんどんと爆破して火の子が飛ぶ。酒と煙に上氣した村人は舞うて家族協同で竿をかたむけ、おんべの裾を火煙の中に振り込み、さながら龍が昇天するやうに、うまく煙の中に躍りあがると、時分はよしと竿の先端を火煙に入れておんべを焼き切る。竿から放たれた大きなおんべがさながら火

三三



拜啓 来る十一月七日より同月末日まで左記の如く特別展覽會を開催いたします。  
何卒御來觀下されたく御案内申上げます。

春城翁藏 風俗資料展

本大學及び本館創建の功勞者市島春城先生が、年來蒐集された趣味の藝術  
小品、例へば豆本シークスピア全集、婦人吹笙瑣輪等の演劇資料を中心  
に、我國最古の百萬塔、程君房方千魯の名畫、五百年前の蓮の實、支那虫  
篋、古錢、虎符、蘭醫藥籠、其他東西古今に渉る各種風俗資料總計二百餘  
點で、今回特に御出陳を請ひ、眼福をお頒ちすることゝ致しました。

◎其他常置展列品、新收品等平常通り公開してまいります。

昭和十四年十一月六日

早稻田大學 坪内博士 演劇博物館

昭和十四年十一月七日より同月三十日まで

春城翁藏 風俗資料展 目録 於 演劇博物館

本大學及び本館創建の功勞者市島春城先生は、多方面にわたる趣味の人として聞えてゐる。年來蒐集された趣味の藝術小品は夥しい數に上つてゐる。其の中には、例へば豆本シークスビヤ全集、出土品の樂人や舞踊の人物等演劇研究資料も少くないので、今回風俗資料をも籠めて御所藏品の一部を、特に請うて出陳し、眼福を頌つことゝした次第である。

早稲田大學 坪内博士 演劇博物館

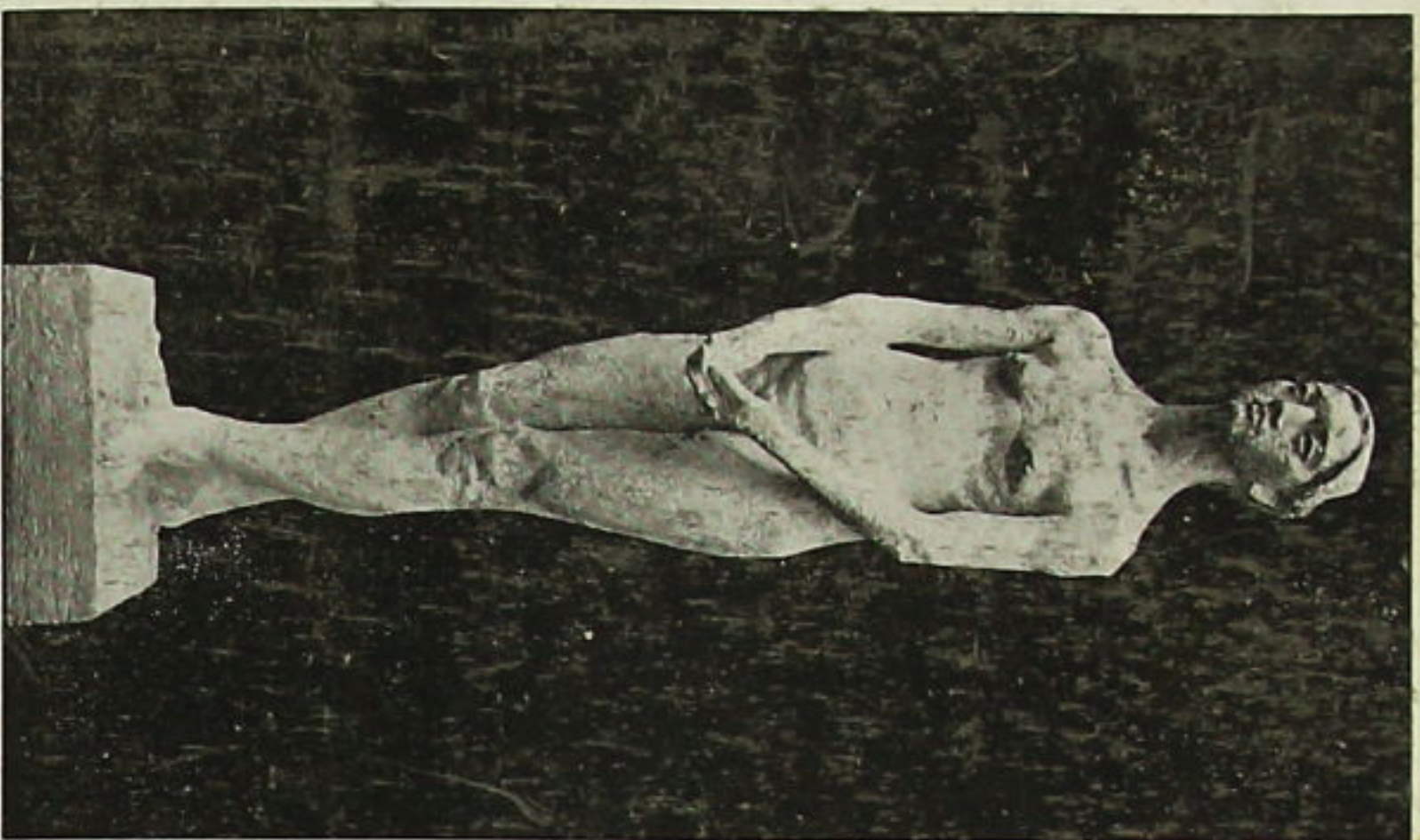
Table with columns for item names, categories (e.g., 大ケース, 小佛像群), and page numbers. Includes sub-sections like (上段), (中段), (下段), (追加), and (追記).

拜啓 来る十一月七日より同月末日まで左記の如く特別展覽會を開催いたします。何卒御來觀下さるべく御案内申上げます。

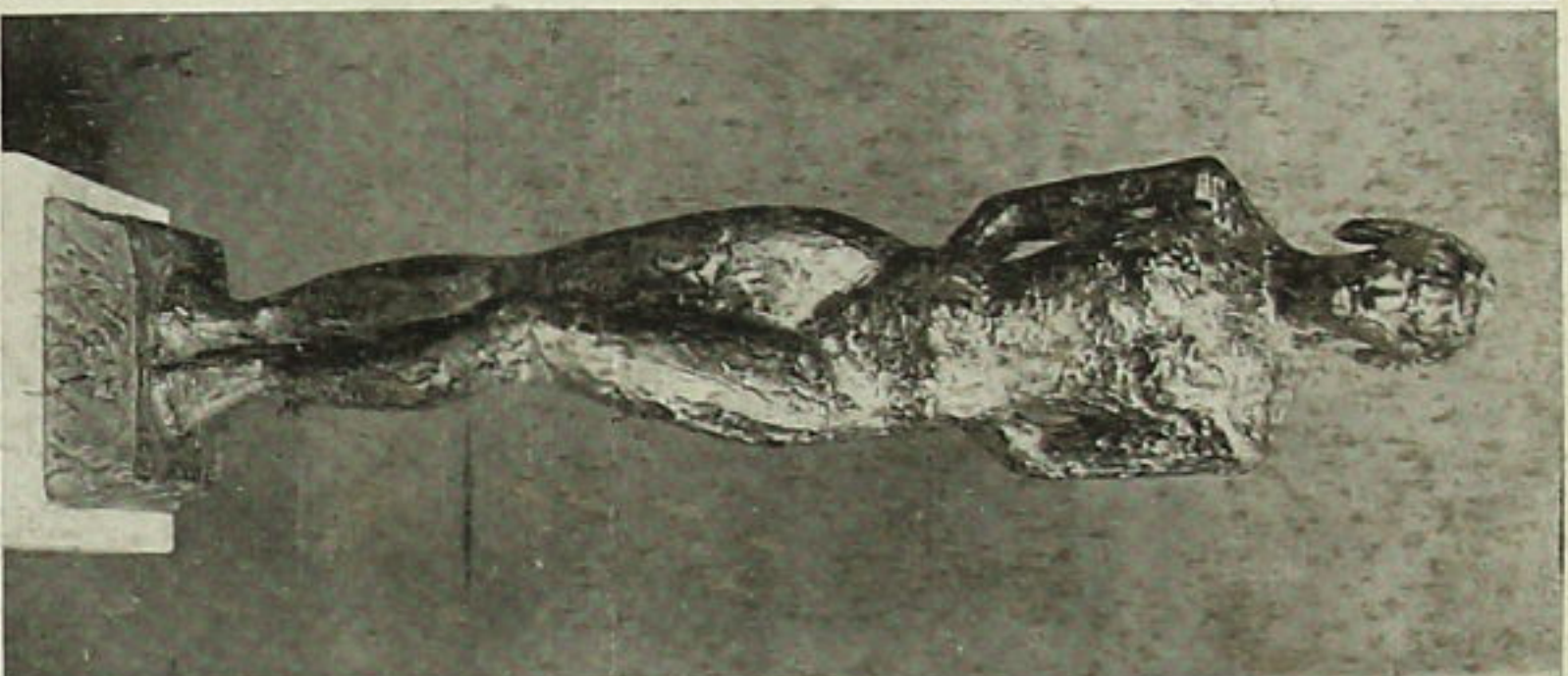
春城翁藏 風俗資料展

本大學及び本館創建の功勞者市島春城先生が、年來蒐集された趣味の藝術小品、例へば豆本シークスビヤ全集、騎人吹笙輪等の演劇資料を中心にして、我國最古の百鳳塔、程君房方千魯の名壺、五百年前の蓮の實、支那虫管、古鏡、虎符、蘭醫藥箱、其他東西古今に渉る各種風俗資料總計二百餘點で、今回特に御出陳を請ひ、眼福をお頌することゝ致しました。

◎其他常置展列品、新藏品等平常通り公開してまいります。



文部省美術展覽會出品



不列志丹慶



第一美術展覽會出品

59741

